
魔女の事情

びたみん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔女の事情

【Nコード】

N3714T

【作者名】

びたみん

【あらすじ】

「なんとかして！！」幼馴染の頼みに頷いて、魔女はその調査を始める。全く、とんでもないことになったなと思いつつも、そこに転がって来た「金」の話に釣られ、またもや面倒なことに首を突っ込む。国を支える、魔女の物語。

イラスト 最終更新【7/31】（前書き）

魔女の事情関連のイラストなんかを載せて参ります（・ω・）（

イラスト 最終更新【7/31】

> i 2 8 3 7 2 — 2 2 4 1 <

【2011.7.31】

サイネリア・パルケット・ヴィヴィッド

主人公の落書きです（´・ω・｀）

耳の辺りに違和感がありますね、はい。すみません！！

お絵かきソフトの機能に感動し、その勢いのまま描きなぐったらかんなことになりました。

耳はちゃんと人間の耳ですよ！！このときの私の脳内では翼に変換されていただけです！！

本作ではちゃんと人間の耳なんですよ（´・ω・｀）

最近のイラストソフトはすごいですね……（´・ω・｀）

あーんなこともーんなこともできてしまいます（´・ω・｀）

イラスト 最終更新【7/31】（後書き）

追加などありましたら、活動報告にてお知らせいたします（
艸、）。

突然の頼み

「サニー！！」

「何よ、どうしたのマリエ」

「その片手に持つてる不気味な色合いの液体を持つ貴方を買ってお願いするわ！！」

「なんだか妙な買われ方ね。

何よどうしたの」

「私、私……」

先程迷惑な程の勢いで扉を開けたというのに、今度は顔色を真っ青にして震え始める幼馴染に、ただならぬ空気を感じてそっと近寄って肩を抱く。

「どうしたの、何があったの？」

「私っ」

カタカタと震えていた全身が、いきなりピタリと止まった。俯いて見えなかった顔を、急に上げる。

「人を、殺したの」

目をギョロリと見開いて、顔色だけが真っ青なままに無表情に言い放つ。

「……え？」

瞬きなど必要ないとも言つように、目は見開かれたままだ。口だけが不自然に動く様は、まるで魚のようだった。

「お願いっ何とかして!!」

と思えば、恐怖に震え上がる乙女へと変貌を遂げる。
とりあえず、私は話を聴くことにした。

「話を聴くわ、どうぞ、上がって。」

「あ、ありがとう」

恐る恐る周囲をキョロキョロを見回しながら、奇妙な形に歪んだ建物の内部へと足を踏み入れる。

「きゃあっ」

先を歩いていれば後ろから悲鳴が上がって、すぐにカタカタカタと言つ不自然な音が響く。

「マリエ、気をつけて頂戴。
骸骨くんを蹴らないでよ」

「う、ごめんなさい」

慌てたように足元の少し先に転がった骸骨に謝る。全く、先ほど骸骨を床に置いたのがいけなかったのか。

「あ、そこにはトカゲの干物があるの、粉々になるから踏まないでね」

骸骨を跨いで大きく一步を踏み出そうとしたマリエの足元にある、実験用の私物を案じてそう言えば、またもや小さく悲鳴が上がる。

「あ、そこにはドラゴンの肝が」

「え！」

「あ、そこにはトカゲの目が」

「うそ！」

「あ、そこにはマンドラゴラの声を入れた水晶が」

「いやあー!!」

一步を踏み出すごとに上がる悲鳴に溜息を吐いて、片手に握っている製作途中の液体の入ったフラスコを机のフラスコ置きに置いてから、短い呪文を唱える。

「浮くは易し、羽の如く軽い乙女よ」

「きゃああああー!!」

そう唱えた瞬間にマリエの身体が5cm程床から浮く。それはどんと上がって行き、70cm程の空中で、マリエの体はふわふわと揺れた。

「運んであげるわ。これじゃあ二階に上がるまでに私の大事な仕事道具を破壊されかねないもの。」

「う、ごめんなさい……。」

こくりと頷いてから、また前を進み始めると後ろにふわふわと浮いているマリエも進んだ分だけ付いて来る。

「それにしても、相変わらず凄いのね。サニーの家は……」

「魔女の館なんて、だいたいこんなもんよ」

奥にある階段を登りながら、目の前にぶら下がっている蝙蝠いっもじの剥製を横にずらす。階段に転がる干からびたマンドラゴラを蹴り落として最後の一段を上げれば、不気味な一階とはかけ離れた、白に統一され、綺麗に整頓された部屋へと行き着く。

ベッドには洗い立てのシーツが被せられ、白いチェアーには金色で唐草模様が施されている。絨毯は通気性の優れた山羊ヤギの毛で編まれている、四本足のテーブルの上に置かれた花瓶に飾られた花だけが、紫の淡い光で輝いている。白いカーテンの合間を縫って踊る太陽の光が部屋の中を開放的に見せていた。

「やっぱりコッチは綺麗なのね」

苦笑するように呟くマリエを絨毯に降ろして、白い木で組み立てられ、ガラスの戸が嵌った食器棚からティーカップにティーポット、茶葉を取り出して、一階で沸かしていた湯をパチンと指を鳴らして出現させると、素早くお茶の用意をする。

幾分落ち着いたのか、くつと目を閉じてソファアに腰掛けて手を

膝の上で握っているマリエの前に、温かい湯気を立てる紅茶を差し出す。

「ありがとう」と力無く笑ったマリエに、自分も腰掛けながら紅茶を口に運ぶ。器用に肩眉を上げて話を促すと、伝わったらしく、マリエはぼつりぼつりと言葉を零す。

「恋人の、バレンのことなんだけどね、今日、彼とお別れしたの」

「へえ」

内心、やっと別れたか。と思った。
顔が良いだけの、いけ好かない男。

「彼に抱きついて、耳元でさよならって言ったの」

「場所だとか、何で別れることにしたのかとかは？」と内心首を捻ったが、とりあえず話の腰を折ることはせずに頷く。

「そしたら、いきなり彼が『結婚しよう』って言い出して、私、咄嗟に無理だって言ったの」

当然だ。良い判断だと思う。

「なんだか最近怖くって……。
私が死んだら私の死体を食べるとか言うの、そしたら血と肉になるからずっと一緒だねって」

わお、こりやまたとんでもない気狂いだ。

「それで、怖くなって、お別れしようと思ったの。」

彼は冗談だと思ったみたいで、最初は笑ってたんだけど、だんだんと状況が分かってきたら、怒り出して……」

女に捨てられるときの気が狂っている男の典型だ。あいたたた。

「それで、首を絞められそうになって、咄嗟に傍にあった瓶で彼の頭を殴ったら、動かなく、なっちゃ……っ」

恐怖が甦ったのか、温かそうにカップを包んでいた手は、またもや色をなくして震え始める。

「彼が地面に倒れて、そしたら血が凄くて……」

こ、怖くなって、逃げ出したのっ

で、でももしかしたら気絶してただけで、手当てすれば助かるんじゃないかと思って、戻って見たら、息、して、なくて——」

震えは彼女の手の中のカップの中身にまで伝わって、茶色い液体は不規則に波打っている。紅茶のカップをそっとソーサーに置くと、マリエの手をカップごと包み込む。

「分かったわ、なんとかしてあげる。

“善き魔女”の名に懸けて、その頼み、聞き入れましょう」

マリエはほっとしたように頷くと、深々と頭を下げた。

「お願いします。」

こうして、メノン国唯一の魔女、サイネリア・パルケット・ヴィヴィッドこと、人々に世界中でも数少ない善良な魔女として認められた“善き魔女”は、幼馴染の愚かな願いを聞き入れるのだった。

突然の頼み（後書き）

若輩者ですが、精進していきたいと思っております。

つきましては、皆様からのご指摘、アドバイスなどをとても喜びます。涙を撒き散らしながら狂喜乱舞いたします。

どうか応援の程、よろしくお願いいたします（・ω・）

厄介ごと

と、言うわけで、現在森の中。

そして目の前にはやたら青白い男一名。

うん、しつかり死んでる。

「さて、どうしたもんかしら」

何とかすると言ったものの、どうするか。

と言うより、どうして欲しいのか？

生き返らせて欲しいのか、はたまた死体を隠蔽してほしいのか、肝心な所を訊くのを忘れていた。

「戻って確かめて来ようかしら」

しゃがみ込んで、目の前の顔だけはいいい男の鼻をツンツンと突付いてみる。しつかりと冷たい。

「めんどくさー、いやいやめんどくさー」

…… 善き魔女と言われる彼女は、実は心底面倒臭がりであった。

「まあ、一回開いてみるか」

ふっふっふと、何故か妙に楽しげに笑いながらその手にあるものは、鋭い、ナイフだった。

「ふんふん」

しかもビブラートの利いた鼻歌まで歌う。そのままのご機嫌で、彼女はイケメンの死体のシャツのボタンを、外したのだった。

「……あら？」

そこに見つけた奇妙な紫色の斑点に、内出血だと分かる。しかも直径1cmにも満たない小さな斑点だ。それが数個、胸元に浮かんでいる。

「死因は、頭じゃないのかしらねえ」

暢気に語尾を延ばしつつ、胸元から移動して頭の方へと目を遣る。

「何で包帯？」

どう言う事だろう。マリエが巻いたのだろうか。顔を近づけ、よく確かめようとした瞬間、森の入り口付近から怒声が聞こえた

「……何かしら」

不穏な空気を感じ取り、気分は真面目なものへと入れ替わる。

「疾駆を求む、木々の合間を撫でる風」

小さく呟いた途端、己の身体が空気に溶ける。意識だけが残り、視界は一気に広がる。森の木々にぶつかると思いきや、文字通り風の如し。ただ木の表面を撫でただけで、木々に邪魔をされても、通り過ぎれば再び収束する。

「殿下!!」

「誰か、医者を！！！！」

「お、俺たちの村にや医者はいねえっ」

「なんだと！！」

不穏な空気が近くなり、実体無く自然と溶け合っていた意識を、自分の元へとかき集める。

そう言えば、バレン君を置いてきてしまった。まあいいか。腐れば実験の材料にでも使おう。

「如何なさって？」

そう言って、人の輪に言葉を投げかければ、一斉にバツと振り返る。

そして、皆固まったように、サイネリアを見つめた。

「まさか、女神の迎えか……？」

群集の中から、呆れるような言葉が上がったが、サイネリアは意味が分からず「はあ？」と、チンピラの如く見下した視線で以って答えた。

すると、我に返ったかのように、人垣の奥のほうから声上がる。

「おいっお前、なにも……」

「善き魔女！！」

「魔女様！！！！」

町人の縋る様な歓喜の声を聞いて、奥からは「魔女……？」と訝しげな声が聞こえた。

サイネリアの事を知らないとなると、この辺りの人間ではない。この騒ぎの当事者か、関係者だろう。

「御機嫌よう皆様。

少しお通し願えるかしら」

「ど、どうぞ……！」

慌てて回りを取り囲んでいた人垣が割れる。中心へと歩いていくと、

……おっさんが、仁王立ちしていた。

「あら、随分むさ苦しいお方が立ってらっしゃいますわね」

そう言つてサイネリアがニツコリと微笑むと、厳つく此方を警戒していた筈の鎧を纏った体格の良い男は、ポカンと此方を見下ろしている。

「して、如何なされたのか？

後ろにお控えは、我がメノン国第二王子、カーネル・ウン・ゲイリアム・メノン王子とお見受けしますが、何故意識が薄まっていますのしょう？」

サイネリアがそう問えば、鎧の男、恐らくは護衛だろう、近衛らしきその男はハツとして剣の柄を握ろうとした。そして抜こうとしたその瞬間、柄の先を押さえて、抜けないようにする。

ゴクリと唾を飲んだその男は、ゆるゆると剣から手を引いた。も

う抜く気はなさそうだ、サイネリアも手を引く。

「まさか……魔女とは……」

「申し遅れました、サイネリア・パルケット・ヴィヴィッドと申します。

“善き魔女”と言った方が、お耳に馴染んでらっしゃいますかしら?」

サイネリアがそう名乗った途端、男は物凄い速さで……なんと、土下座した……。

「何のマネでしょう」

「頼む……王子を、殿下を……!!!」

助けて欲しい、その気持ちに痛いほどに伝わってくる。

「さて、まず此方が要求いたしますのは、大の男がか弱い小娘に頭を下げていると言う情けない状況を退けていただくことかしら」

遠まわしに顔を上げると要求されて、男はハッと頭を上げる。

懇願の籠った眼差しに、サイネリアは頷いた。

「始めより、その腹積もりでございます。殿下に触れても宜しいでしょうか?」

護衛の任に就いているのだろう男に確認を取れば、勢い良く立ち上がって、道を開けた。

——全く、また厄介ごとか。

見定める

「これで、大丈夫でしょう」

額に浮かんだ汗を拭って翳していた手を引く。

緊迫していた空気に終止符が打たれて、周囲からも脱力の溜息が漏れた。

「こんなことが……」

呆然と横に立つ男を見上げて、再び目の前に横たわる人物へと視線を戻す。

先ほどまで不規則に浅かった息はゆっくりと長いものへと変わっている。これで一先ず安心だろう。

「それにしても……」

力の使いすぎで青い顔に、サイネリアは眼光鋭く男へと詰め寄った。

「殿下に護衛が二人とは、一体どういった了見です」

立ち上がって、一人は先ほどからの男に、もう一人はオロオロと右往左往している若い騎士へと眦をきつくして睨みつける。

「それは……」

言いづらそうに口ごもった男に、サイネリアは毅然と言葉を続ける。

「殿下はこの国の宝、その方に何かあれば貴方方の首が飛ぶだけでは済まされませんよ。」

国民は絶望し、国は乱れるでしょう。それに乗じて、この豊かな国を狙う輩に戦争を^{けしか}囁けられれば如何なさいます。

それはあつてはならないこと、現にこうして殿下は命の危機に直面なされた。」

サイネリアの台詞に、若い騎士は「ひいつ」と声を上げた。なんとも情けないことだ。冷たい目で見遣つてから、上官らしいこの男をひたと見つめる。

「……仰る通りだ。」

申し開きの余地もない。だが……」

チラリと大衆を見遣つてから、サイネリアはしまったと思った。恐らく、一般市民に聞かせられるような内容ではないのだろう。なのにそれを公衆の面前で言及してしまうとは……。

「とにかく、殿下をお運び致しませんと……

私の狭いボロ小屋でよろしければ、ご案内いたします」

「あ、ああ。」

お心遣い、痛み入る」

サイネリアは町人達に向き直り「どうか他言のなきよう、メノンの神のお導きに」と言つと、カーネル王子を抱きかかえた護衛の屈強な男と、ひ弱そうな若い騎士を連れて踵を返した。

「改めて名乗らせて戴く。

ゴツカル・グラン・ガリオールだ」

二階の私室で、サイネリアはゴツカルと名乗った護衛、ひ弱そうな騎士とテーブルを挟んで向かい合っている。

「あら、ガリオールといえますと……」

聞き覚えのある名に思わず零すと、男はコクリと頷いた。

しかし、図体がデカイだけに、窮屈そうである。主に、ゴツカルにソファアの大部分を取られ、端の方で縮こまっているひ弱（もうそう呼ぶ）がであるが。

「さすが、ご存知か」

「国民の誰もが知っている名ですわ。

名門ガリオール家^{いえ}。代々、將軍を輩出している、爵位は伯爵のお家」

「お察しの通り、私も恐縮ながら、將軍という地位に就かせて頂いている」

「わざわざ將軍ともあろうお方が、王位継承権第二位のカーネル殿下の護衛ですか？」

普通、將軍自ら護衛などしない。あるとしても、国王ぐらいであるろう。

その息子の、しかも第二王子の道中の護衛など、一体どういうことだ。

將軍とは、本来その国の主たる者に仕えるのだ。国であるなら国王に。これではまるで、国王に次いで第一王子までもすつ飛ばして、第二王子であるカーネル王子が最高権力者のようだ。

「……まさか」

ハッとして目を見開けば、サイネリアの予感を肯定するかのよう
に、將軍は頷く。

「国王が、ご逝去なされた」

「なっ！！」

いくら辺境の町と言っても、国の主が亡くなったとあれば、噂の届かぬはずが無い。つまり、国王が亡くなったことを、国民に知らせ
ていないのだ。

「まさか、第一王子まで……」

「いや、それが、分からない」

組んだ手を膝に置いて睨みつけるような視線で以って、自分の組
んだ拳を見ている。力の入りすぎで白くなった関節は、そのまま、
この国の状況の悪さを表しているようだ。

「突然、消えた」

「消えた？」

「行方不明と言うことですか？」

「自ら出奔なされたのか、はたまた何者かの手によるものか、判断がつかねる」

「しょ、將軍、そんなことまで話してもいいんですか!？」

ずっと黙っていたひ弱が突然立ち上がって、話の腰を折る。

「馬鹿者、黙ってる！」

他国ではともかく、我が国では“善き魔女”と言われる

「ですが、裏切り者ですよ!!」

そう言って声を張るひ弱に、今度はサイネリアが力チンときた。

「随分なお言葉ですが、ヴィヴィッドの魔女を先に追い出したのは王族です。」

ノルン国に居る魔女は今も昔もヴィヴィッドのみ。そして、代々王家に御仕えしてきた。広い知識と長い年月による経験で王を支え、魔女の秘薬で命をお救い申し上げ、魔力で戦争を勝利に導いた。

魔女の寿命は六百年とも、千年とも言われる。その長い時間を、全て王家に、国に捧げ、私の一家も今では私一人。

先代の善き魔女に、先々代の国王は恋をなされた。愚かにも王は妃として迎え入れようとなさったが、寿命の長い魔女が王位に近くなれば、王が死んだとき、魔女が女王となってしまう。それを危惧した先代の魔女、私の母は王を固辞した。

そして、怒った王は、ヴィヴィッド家の魔女の出入りを禁になさ

れた。

これが、私が母より伝え聞いた真相です」

「そんな……嘘だ……」

呆然と呟くひ弱を睨んで、サイネリアはゴツカル將軍に「まあ」と言う。

「將軍はご存知なのでしょうね。

いくら魔女と言えども、これだけ王家の事情を暴露するのですから、魔女が王家にお仕えしていたことを」

「ああ、知っている。

王家に恨みがあると言うのは承知している、だが、どうしても今は貴方の、魔女の協力が必要なのだ」

「頼む」と言って頭を下げる上官に腹を括ったのか、ひ弱でさえも頭を下げてくる。

そして、サイネリアは、ふっと笑った。

「申し訳ございません、試しておりました」

「は？」

ふふつと笑う。

「母より言いつけられておりました。

王家が危機に瀕し、魔女の力を必要としたときは、迷わずお助けせよ、と。

ですが、私も我が強くて。この目で、手を差し伸べる人物を見極

めたかったのです。

貴方方がこんなにも必死になって守ろうとなさっている方です、信じましょう」

「……恩に、着るっ」

そう言つて、一層深く頭を下げた二人組みに、カーネル王子の人格を垣間見た気がした。

一年前の嵐

「ところで、王子は見つかりましたか？」

頭を下げていた二人は、驚いたように顔を上げて、訝しげに眉を寄せた。

「違いましたか？」

第一王子のボルマツト殿下を捜しにいらしたのかと思っておりますが」

ゴツカル將軍は目を見開くと、諦めたように溜息を吐いた。

「ご推察、恐れ入る。」

ボルマツト殿下のお身体が丈夫ではないことは、ご存知か」

「ええ、存じ上げております」

第二王子のカーネル王子でさえ出席せざるを得ないパーティーや式典などに、第一王子であるボルマツト王子が出席したことは殆ど無い。それは表舞台に殆ど姿を現さない、つまり王子の顔を覚えている者など極々僅かで、しかもそれは幼かりし頃の王子であるから、国民や貴族の間でも姿を見ている者は殆ど居ないらしい。だが、王家からは何の公表も無く、いつからかボルマツト王子はお身体が弱いのだと噂されるようになったのだが、本当だったらしい。

「だが、ほんの一年ほど前まで、王子はご健康であられた。それが、一年前より体調を崩され、伏せられることが多くなったのだ」

「ですが、王子の姿は、ご幼少の頃より窺った試しがありませんが……」

「王子には特殊なお力が……」

「まさか、先祖還りですかっ」

思わず声を荒げると、將軍はゆっくりと頷いた。

「何故っ私達を頼らなかったのです!!」

王家は元は神の末裔、稀に先祖還りとして特殊なお力を持ってお生まれになる方もいらっしやいますっ

その力の制御をご指導するのも、善き魔女の役目っ!!」

サイネリアはギュッと拳を握り締める。

過去を遡れば、魔女の助言を聞かず、力を暴走させた王も存在した。その度にヴィヴィッド家の魔女たちは命掛けでその暴走を食い止め、しかし抑え切れなかった被害は国の国土を削った。

だが、暴走しない限りは、その強大な力を恐れた他国への、強い牽制となるのだ。故に、ノルン国に先祖還りの王が立った代は、とても豊かで安泰な治世となった。

「王家では、魔女の出入りを固く禁じていたのだ。

先々代の王、バライスク王の怒りを買ったとして、その禁忌の触れぬことは暗黙の了解だった。

度々起こる力の暴走に、王子の肉体は保たず、ついに一年前、その力は、爆発した」

「……あの、台風は、まさか」

一年前の悲惨な状況を思い出し、サイネリアは呆然とその風景を思い出す。

荒れ狂う台風は、しかし過ぎ去った後が酷かった。七日七晩続いた暴風に、雷、暴雨、伴う河の氾濫^{はんらん}、国土は酷い事になっていた。田畑の作物は泥水に浚われ、家は風に吹き飛ばされ、雷は人々の恐怖を煽り立て、暴雨は動物達を^{なぶ}蹴り殺しにした。無事だった場所までもが、雨によって弛んだ地盤が土砂となり、押し寄せた。

どれ程の人々が亡くなったのか分からない。王家の統計では、国民の約三割という数字が提示されたのだ。

そして、サイネリアもそれによる被害を受けた。

魔女は、十八になると、ある儀式を行う。魔力を安定させ、心臓を取り出す儀式。「星の導き」魔女達は、そう呼んでいる。

魔力の安定は大事だが、この儀式において何よりも優先されるのが、心臓を取り出すことだ。魔女の心臓の鼓動は、十八を迎えるとともに緩やかになる。止まっているに等しい速さで、ゆっくりとゆっくりと時間を刻むのだ。それ故に、魔女は長生きをする。取り出した心臓は、大体魔女の首飾りとなって肌身離さず身に着けている。サイネリアは儀式の最中で、他の魔女の立会いの元、心臓を取り出す最中だった。だが、国の危機を聞きつけ、心臓の半分を体に残したままサイネリアが駆けつけた時にはもう後の祭り。嵐は過ぎ去った後で、サイネリアにできたことと言えば、人々への支援だけだった。

完全な儀式を終えなかった代償なのか、サイネリアの黒かった髪からは色素が抜け、限りなく白に近い、薄い金、プラチナの色となり、瞳の色も黒から薄い茶色へと変貌を遂げた。

「ボルマツト王子の力は熱となり、天を貫いた。

そして厚い雲が城を覆ったかと思えば、土砂降りとなり、すぐに雷が落ちた。王子は意識がなく植物状態で、目が覚めたのは約一ヶ

月前。

王が崩御なされたのと、ほぼ同時だった」

「……」

何も言わずに、まだあるだろう先を促した。

約十一ヶ月間、植物状態だったという。臥せていたところの話ではない。

「目覚めた王子は、別人の、ようだった……」

「別人とは？」

「元より気のお優しい方だったが、部屋より一步も外出することもなく、そうかと思えば気が狂ったように暴れる。

力を解放させることはなかったが、我々家臣は不安に震えたさ。

次期国王を、この方にしてもいいのかと」

確かに、不安に思うことはあっただろう。そのような気狂いの王子が間もなく国王だなどと。国が荒れるのは勿論だが、国の滅亡にまで関わってくるかもしれない。

「……あつ」

「どうか？」

忘れていたことを思い出して声を上げたサイネリアに、ゴツカル將軍は訝しげに問う。

「あ、いいえ。申し訳ありません、こちらのことです」

気狂いで思い出した。マリエの元恋人こと、バレン君の事をすっかり失念していた。後で回収せねばならない。

「だが、その不安は三日の内になくなった。
王子が、失踪なさった。」

「目覚めて三日とは、えらくご健勝な……」

「私は内心喜びもいたした。
これで、第二王子のカーネル殿下を、正当に王位にお迎えできる
と」

この將軍も馬鹿ではない。話をしても知性が垣間見えるし、
何より国の事を思っている。

そんな男が選んだ、王。少し興味が湧いた。

「ならば、そうなさったら宜しかったのでは？」

すると將軍は残念そうに首を横に振るのだ。

「国の金食い虫共が、『探しもせず何を手勝手なことをするのか』
と抜かしおつてな。

ボルマツト殿下のお顔が知れていないのを良い事に、犯罪者として、情報を差し出したものに賞金まで出すと言って、人相書きのお触れを出した。」

恐らく商務大臣辺りだろうか。昔から王家に強い発言権を持つ一家だ。

「だが何よりも、ボルマツト殿下の帰還を強く望んでおられるのは、他でもないカーネル殿下だ。

カーネル殿下が大々的にボルマツト殿下を庇護なされれば、それをいいことに、王位から引き摺り下ろされかねない。

ならば影武者を立てて、自分が迎えに行くと言われた。止めれば、金食いジジイ共に協力を仰ぐと言ってしまわれては、もう何も言えなくてな……。

せめてと私が護衛に就いたのだが、この有様だ。不甲斐無いつ」

悔しそうに俯いて、最後の言葉を苦々しげに吐き出す。

「カーネル殿下は策士であらせられる。

もしもボルマツト殿下が王位に就いたとしても、自らが迎えに行つた、麗しき兄弟愛として民衆からの支持を受けますね。そうなれば大臣たちも、殿下の権力を理不尽に取り上げることとはできなくなってしまう。民衆からの怒りを買っては、元も子もないのですから」

果たしてそこまで計算していたのかは謎だが、結果的にはそんな可能性もあるのだ。

「……噂話なら、本人の居ないところでして欲しいものだな」

ゴツカル將軍とひ弱は思い切り後ろを、二人に向かい合って座るサイネリアは二人の後ろを、三人はベッドの上にゆっくりと上半身を起こした金髪も眩しい次期国王（仮）に、畏敬の念を持って頭を下げた。

そしてサイネリアはいち早く顔をあげ、鋭い瞳を花の微笑みに埋もれさせて声を掛ける。

「お目覚めですか、殿下」

さあ、貴方の戦争はここからよ。

果たして、私を見方につけることができるかしら？

手掛かりの糸

「ここは、一体……」

頭が痛いのか、こめかみを押さえながらも周囲を見回す。

「ご気分は如何ですか？」

立ち上がってカーネルの傍で佇むと、サイネリアはもう一言声を掛けた。

「ああ、俺はとうとう天国に来たのか……」

女神の姿が見える。

……何か、むさ苦しい髭面が見えた気がするが、あれは俺の脳の錯覚だな」

サイネリアの手を取って気障ったらしく手の甲に口付けたかと思うと、背後に見えるゴツカル將軍とひ弱を見て、現実逃避のようにサイネリアを真っ直ぐに見つめなおした。

「ところで、麗しの美の女神よ、一体どうなったと言うから俺は此処で寝ているんだ？」

「カーネル殿下、私はサイネリア・パルケット・ヴィヴィッド。わたくし

王家に代々お仕えして参りました、善き魔女の一族でございます。最も、一族とは名ばかりで、ヴィヴィッド家は私一人しかおりません」

サイネリアの素性を聞いて、カーネルは何か思い出したのか、慌

ててベッドから降りようとする。

「殿下、今しばらくは安静にっ」

サイネリアも慌ててカーネルをベッドに引き止める。脚はもう既に床に下りているし、辛うじて腰だけがベッドに乗っただけの状態ではあるが。

「兄上はっ！？」

サイネリアを見たあと、ゴツカル將軍へと視線を外して声を荒げる。

やはり、この町にはボルマツト王子を捜しに来たらしい。

「森へと入る寸前、殿下は突然倒れられた。

そこを、魔女殿にお助けいただいたのです。ボルマツト殿下は、残念ながら未だお姿も見えず」

將軍の報告を聞いて、カーネルは脱力したように「そうか」と一言零して、力を抜く。カーネルの肩を押していたサイネリアも力を抜いて、思い当たる節を報告しようと試みた。

「殿下、ご負担でなければ、お話をさせていただきたいのですが」

この町に住む魔女の言葉に、何か手掛かりがあるかもしれないと察したのか、「分かった」と言って立ち上がる。

別にベッドに座ったままでも良かったのだが今更言うのもあれなので、ふらつくカーネルの肩を支えながら歩く。

「……」

そこで気付く。空いているソファは今立っているサイネリアの席と、その隣だけだと。

「どうかしたのか？」

首を傾げるカーネルから目を逸らして、「いえ……」と歯切れ悪く返すと、カーネルをソファに座らせて、自分もその横に腰を下ろす。

……心臓に悪いとはこのことだ。

カーネルの美貌は、国民に持て囃されるほどで、話だけは聞いていた。だが、聞くと見るとでは大違いだ。男であるにも関わらず、幾人もの吟遊詩人たちにその美を歌われた、ノルン国の美貌の王子。先ほどから気にしないようにはしていたのに、カーネルが隣に座って、真摯に見つめてくるのだ。先ほどのようにふざけた様子でもなんでもなく。

「……では、今からお話を致します。

が、田舎者の戯言だとも思っただけ聞き流していただいても構いません。」

そして王子の美貌によく似た顔を、サイネリアは知っていた。そちらには、こんなにも感動など覚えなかったが。

一ヶ月前から、この町に住んでいた、男のことを。

事実の端

將軍とひ弱も、サイネリアの様子から、立ち上がっていた腰を下ろした。

が、目の前の光景に、冷や汗を掻く。

「魔女殿、そんなに不躰に見てはっ」

「ああ、その黄金に命を育む木の色を混ぜたような神秘的な色には、きっと女神ノルンでさえも嫉妬するだろう」

蕩けるような色を浮かべてそう言ったカーネルに、ゴツカルはガクツと脱力したのは言うまでも無い。

「ええ、王子はそう言うお方でした……」

ボソリと俯いて呟いたゴツカルの台詞と同時に、舐める様に「不敬だ」とどこぞの大臣に糾弾されそうな程に、カーネルへと注いでいた視線を引き剥がした。

「失礼しました」

カーネルの先ほどの台詞は丸ごと無視して、王族を不躰に観察した非礼を詫げる。

まさに、観察だ。

「殿下の顔によく似た面影を、存じております」

そう一言呟いたサイネリアに、カーネルは気障ったらしい雰囲気

を引っ込め、將軍は項垂れていた顔を上げ、ひ弱（まだ名前を聞いていない）は緊張に冷や汗を流しながら背筋を伸ばした。

「ボルマツト殿下が行方不明になられたのは、一ヶ月前だとお聞きしました」

カーネルがこくりと頷く。

「一ヶ月前より、滞在していた男がおります」

「していた？」

カーネルの鋭い指摘に、サイネリアは一つ頷くと、もう居ない事を話す。

「ええ、今日、亡くなっています」

ガタンッ

音もなくソファアから立ち上がったカーネルは、まだ回復しきっていない体力のままに、音を響かせて机へと辛うじて手を突いた。將軍とひ弱が慌てて身を乗り出す。

「まだボルマツト殿下と決まった訳ではありません、魔女殿のお話を聞かせていただきましょう」

「そうですよ、殿下」

宥める二人に、立っていた気を落ち着けて、静かに座る。

「すまない、続けてくれ」

嫌な予感に顰められた眉に見ない振りを決め込んで、サイネリアは視線で將軍とひ弱にも腰掛けることを促す。急いで座った二人を確認して、再び口を開く。

「死因は不明です。

頭部の負傷、それに、何故か鈴蘭の香り。」

「スズラン？」

「この国では、殆ど馴染みのない花でしょうね。
この花ですよ」

これ、と手で指し示しているのは、全員が囲むテーブルの中心。ひと枝にいくつもの鈴がぶら下がっているような、小さい花だ。白に、サイネリアが改良した、紫の色とを活けてある。

最後、バレンの胸の内出血に死因を今一度たしかめようと、頭部を確認しようとしたとき、確かに鈴蘭の香りがした。

サイネリアの言葉を聞いて、カーネルは身を乗り出して鈴蘭に顔を近づけると、納得したように身を引いた。

「強い香りだな」

「遺体を見た方が早いでしょう。

皆さんは此処にいらしてください、私の家です。安全でしょう」

「一体、何処へ……」

ゴツカル將軍の呟きに、サイネリアは少しだけ笑うと、ソファーに掛けてあったフード付きのマントを手にとって、フードを目深に

被る。

これで顔も年齢も、全く分からなくなる。身体の線の細さに、辛うじて女かと分かるぐらいか。

「事実を、回収しに」

そう言って、サイネリアは暗くなり始めた森の中へと姿を消した。

闇に紛れて

「腐ってないわよね……」

顎に手を当てて、既に生き物でなくなった物体を見下ろす。

流石に、まだ一日も経っていないのだから腐っていないことは分かっているが、今からこれを運ばなければいけないと思うとそう言わずにはられない。

「めんどくさー」

最早口癖と化している台詞を零すと、死体のバレンへと立ったまま手を翳す。

「飛ぶが易し、共に風のように舞い降りる」

……なんとかならないのかしら、この詠唱。

「詠唱呪文」って、ちよつと恥ずかしいのよねー。

「あ、やっぱり似てる」

空中へと身体が浮く。サイネリアと共にバレンの身体も浮くので、先ほどよりも顔がよく観察できる。

町全体を覆うこの森の外れに、サイネリアの家はある。遠い訳ではないので、魔法を使えば紅茶を淹れることよりも早く着く。

二階のベランダ目指して降下すると、サイネリアは無事に着地する。後ろにドスンと何か落ちた音がしたのは気にしない。窓を開けて、客室へと入る。そしてまた私室へと続く戸に手を掛けて、先日魔法を掛けたことを思い出す。

「あ……」

侵入防止として掛けた魔法なのだが、自分の身に降りかかってしまった。

一階の階段を上つてすぐにあるのは、サイネリアの私室、白で統一された部屋だ。一見、ただ一室しかないように見えるのだが、実はドアがある。一つはバスルームもう一つは、今サイネリアと青いバレン君が居る客室だ。

この魔法は、サイネリアの私室からしか、ドアが開かないというものだった。しかも、そこに「ドアがある」と認識しなければ、絶対にドアは見えない。

「うわあ、めんどくさい魔法掛けちゃったー」

先日編み出した新しい魔法だったので、つつい調子に乗ってしまった。

「これは殿下か將軍に魔法解いてもらうしかないわね」

一度、向こうの部屋で扉の存在に気付けば、魔法は解けるようになってる。

嘆息しながら、隣の部屋に向かって声を張り上げようと息を吸った瞬間、サイネリアの、全ての動きが止まった。

呼吸も、身体の動きも。

口元を強く押さえつけられて、腕を後ろに捻り上げられる。

「っ」

人間の、手の感触だった。

「（ああ、もう全く！！」

厄介ごとばかりよッッ！！）」

内心そう吐き捨てて、サイネリアの視界が捉えたのは、確かに先ほど投げやりに運んできた筈の、青い顔のバレン君だった。

「誰か居るのか！」

扉の向こうから聞こえてきたのは、サイネリアの腕を捻り上げている死に損ないと良く似た顔の、カーネルの声だった。

危ない賭け

捻り上げられた腕の痛みと緊張に、冷たい汗が背中を伝う。

口を塞がれているので、呪文は使えない。呪文が使えなければ、魔女として身体からだの強度は人と変わりない。

いっそ掌てのひらにでも噛み付いて、その隙を突こうかとも思ったが、サイネリアが呪文を唱え終わるのと逆上したバレン君に再び襲い掛かれるのと、どちらが早いかなと言えば恐らくバレン君の方が早いだろう。

正直言って、サイネリアにはなす術なしだ。

「おい、誰かいるのか」

呼びかけても返事が無いことに焦れたのか、カーネルがもう一度呼びかけてくる。

「（あ、そうか）」

サイネリアには出来ないが、向こう側の部屋の人たちならばどうだろう。

カーネル王子はともかく、向こうの部屋には、剣術に優れたゴツカル將軍がいる。判断力も、場数も相当に積んで来たはずだ。

サイネリアの作る僅かな隙を、上手く突いてはくれないだろうか。

「（でも……）」

チラリと視界の端に映るバレン君の顔は、なんとも険しい。

そして、状況的には異常を極めてはいないだろうか。非常に不本意だが、バレン君の腕の中に居るサイネリアには分かる。

心臓の鼓動がないのだ。

サイネリアの口を直接塞ぐ掌から伝わる体温も、とても冷たい。そもそも、生きているはずが無い。今日の昼過ぎ、サイネリアは森に横たわるバレンの身体を、しっかりと確認した。脈も、息もなかった。顔色とて、青白かった。

つまり、死んでいるはずの人間が動いている。そして、心臓の鼓動も体温も無いのに、気が昂ぶっているのか身体はカタカタと震えていた。

カーネルの声がしたドアから、今にも誰かが入ってきやしないかと警戒している。サイネリアには、そう見えた。

だが、問題はそこではない。

バレンが死んでいるのに動いていると、今この状況で分かるのはサイネリアだけだ。カーネルたちには、サイネリアが何者かに襲われているようにしか見えないだろう。そして当然、彼らの中でそれは生きた人間だ。

だが、カーネル達にとって判断を鈍らせる一番の要因は、バレンが何者か、ということにある。

「（間違いなく、彼らの捜し人ですもの）」

生まれてこの方、国内ではこの町以外に碌に回った事の無いサイネリアが、都の人間でも知らないボルマツト王子を知るわけが無い。だが、幼い頃より母から、王家の事を叩き込まれてきた。王宮を追われた母は、だがずっと、王家の忠実な家臣だったと言うことだ。そして、権力に浸かった者ならば誰でも知っている権力の象徴、確かにそれはバレンにあったのだ。

幼い頃、「これが王族である方の証よ」そう言った母に、「じゃあ王族の人たちは皆これがあるの?」と言う私。「いいえ、これは特別なもののよ」本に細かく書かれた紋章を指差して、母はこう言ったのだ。「次の王様になる方だけが、お持ちになるもののよ」

と。

グリフォン、古くから知られる、鷲の上半身に翼、ライオンの下半身を持つと言われる王家の象徴。それに五穀豊穡を願った麦の紋章。

あれは確かに、何度も何度も繰り返し見た、次期国王が持つとされる証。その紋章はペンダントとなって、バレンの首に掛かっていた。昼間は気がつかなかった、王位を継ぐ者の証。

つまり、第一王位継承権を持つ人間の、すなわち、現在はボルマツト王子のもの。それを持っているバレンは、カーネル達の捜しているボルマツト王子で間違いないのだ。

「（だから厄介というか、なんというか……）」

そのボルマツト王子が、自分の命の恩人である魔女を暴漢の如く襲っているのだ。

そんな光景を見れば、普段なら対応できることも、できなくなるのではないかと言うのがサイネリアの心配どころだった。

「……。」

実を言うと、腕の関節はもう限界だ。痛みに馴染みのないサイネリアには、少々、いや大分キツイものがある。それでも声一つ上げないのは、生まれ持つ気丈さからかもしれない。

「……。」

急に、静けさが際立ったような気がした。

バレンの、いや、ボルマツト王子であったものも、扉の向こうも、とても静かだ。満ちる静寂に聞こえるのは、己の息遣いと心臓の音、腕の関節と骨の悲鳴。痛いほどの静けさに、それはとても大きく聞

こえる。

「（何？）」

不安になる。

もしかすると、誰も居ないと判断したのかもしれない。

いや、それはない。それでも、何かの音は聞こえる筈だ。
なのに落ちる静寂から導き出される答えは一つ。

ガンッ！！

サイネリアは、思い切りドアを蹴って、ついでに思い切り掌に噛み付く。

「うええ」

口内に満ちた血の味に、行儀悪く舌を出す。

死人の血を口に入れるなどと言う珍しい体験をしたサイネリアは、逆上したボルマツトの手にした銀色の物体がバルコニーから入る月の光を反射する様を、瞬きもせずに見る。

迫る刃は、サイネリアの目の前に、ゆっくりと迫ってきていた。

危ない賭け（後書き）

グリフォン、またはグリフィン、グライフ、ブリプス。

呼び方は多々あれど、皆さん有名なこの架空生物をご存知かと思ひます。

某王家の紋章にも用いられている、鷹の上半身と翼、ライオンの下半身を持つ、あの生物です（´・ω・、）

王家の象徴として用いられ、持て囃されてきたのは事実ですが、恐らく！！

ここからは！おおいに！！

私の自分勝手な設定が混じって参ります（。D）（）

どうぞ、ご了承ください（´・ω・、）

兄弟の再会

スローモーションの様に迫る刃の煌めきは、突然、何故かいきなり横にずれた。

「あん？」

「チンピラのような声を出すな」

ぼうつとしていたサイネリアは後方の、明かりに佇む人物に声を掛けられて、ハッと正気に戻る。

「バレンー!!」

先ほどまで死の影を背負ってこちらに向いていたナイフは、横に吹っ飛ばされたバレン、基ボルマツト王子と共に、横に吹っ飛んでいた。

「……あら？」

吹っ飛んでいるボルマツト王子は、潰れたカエルのような不恰好さで床に転がり、ピクリとも動かない。

「大事はないか？」

バルコニーに向かって立ち、横に吹っ飛んでいるボルマツト王子を見下ろしていたサイネリアは、誰かに肩を掴まれて、反射的に振り払い、それが誰か分かると肩の力を抜いた。

「……カーネル殿下……」

あ、大変、失礼いたしました」

サイネリアの見た先には、向こう側の部屋の明かりを背景に、佇むカーネルがいた。逆行で顔もよく分らないが、声とシルエットでそうだと判断すると、手を振り払った非礼を詫びる。

「どうやら、大事はなさそうだ」

片手をそつとサイネリアの肩に置いたカーネルのもう片方の手は、関節が白くなるほどに、ドアノブを握り締めていた。

……そう言えば、思い切りドアを開けた、凄まじい音がしたような気がする。

冷静に思い返してみると、しかも壁とドアが接触する前、つまりドアが開ききる前に、ゴツツと言う鈍い音がしたのを思い出す。思い切り開けたドアに、ボルマツトは頭を強打して気絶したらしい。……死んだ人間に気絶があるのかどうかは知らないが。

暴れた拍子に、正面にあつた私室へのドアは背後に、背後にあつたバルコニーは正面になり、サイネリアとボルマツトの位置も逆転した。そのお陰で、具合良くボルマツトへとドアが激突した訳だが、もし体勢がそのままだったなら、間違いなく潰れたカエルとなっていたのはサイネリアの方である。

「……どうも、お助けいただいて、ありがとうございました」

些か腑に落ちないところはあるが、サイネリアは再び頭を下げた。

「いや、例には及ばない。」

だが、出来ればその女神の如く美しいから「魔女殿」っ大事ないか
「……」

部屋の奥から顔を出したゴツカル將軍に遮られたカーネルの台詞の先は考えないことにして、

「大丈夫です。」

素早い判断、お礼申し上げます」

「いや、魔女殿のタイミングの良さに助けられた。」

殿下も飛び出す寸前だったからな」

そう言われたカーネルに反応は無く、サイネリアが訝しく思っ
てその視線を追えば、潰れたカエル……いや、ボルマツト殿下、つま
り、彼らの捜し人にだけ強く注がれるカーネルの視線。

「ああ、忘れて……」

いえ、私が言っておりましたのは、この男です」

「……あのー、亡くなったと仰って……」

ゴツカル將軍の後ろから聞こえる声に、声の主は確認できなかつ
た。おそらくひ弱の声だろうが、何せ小さい。ゴツカル將軍の影に
なつて、全く見えない。

「ええ、先ほどまで、確かに死んでいましたよ。」

今も死んでいます。

動いていると言う意味では、確かに活動していましたが、心臓の
鼓動はありませんでした」

そう淡々と説明するサイネリアの横で、呆然として、痛々しい響
きを持った一言が呟かれた。

「……兄上」

確かに、死に損ないに良く似た顔の美貌の王子の口からは、そう
眩きが漏れた。

実はあった下心

軽くカオスと化した空間。混乱したようなゴツカル將軍の声と、様子が見えずに必死になつて見定めようと身を乗り出すひ弱、絶望に近い眼差しを以つて潰れたカエルの様な兄であつたもの、を見るカーネルに、事態の收拾を図ろうと顎に手を当てて思案の体勢を取っているサイネリア。とりあえず、と思ひ言葉を發した。

「隣の部屋へ移動いたしましょう。こう暗くては、気分も落ち込みます。」

ボルマツト殿下をお運び致します、少々お控えいただけますか」

ゆっくりと緩慢な仕草で、濁つてしまつた濃いバイオレットの瞳をサイネリアに向けて、カーネルは一つ頷くとボルマツトとの距離を数歩の距離に広めた。

ゴツカルも、その巨体で塞いでいた私室への入り口から退いて、私室の内側へと控える。ひ弱も一拍遅れでそれに倣い、移動し易げな空間が出来た時点でサイネリアはボルマツトに近寄り、その上手を翳した。

「浮くは易し、羽のように軽い男よ」

うつ伏せに潰れたように不恰好に投げ出されていた手足は、持ち上がるにつれてだらんと下に垂れ下がる。月光だけが頼りの室内では細かい部分は見えないが、絨毯に広がっている染みを見る限り恐らく頭部から出血しているのではないだろうか。

お気の毒様。そう内心毒づくのは、まだ震えている膝の所為だ。先程の出来事は、サイネリアの中で確かに恐怖として記憶されている。

「大丈夫だ」

サイネリアの気丈な様子を見抜いて、まだ恐怖から抜け出られていないことに気付くと、先程よりも幾分光の戻った目でカーネルはサイネリアを見つめた。

その一言に力が抜けて、サイネリアは安心したように微笑んだ。何に対してそう言ったのかはわからない。自分に言い聞かせる様も聞こえたし、サイネリアを励ます様にも聞こえた。恐らくその両方なのだろうな、と頭の隅で考えながら、明るい私室へと移動する。後ろでフワフワと揺れているボルマツを見て、頭の中を整理する必要があるなと思った。

「どうぞ、こちらをご覧ください」

そう言ってサイネリアが一同に示したのは、先程ボルマツの首から拝借したものだ。

「それはっ」

正面に座るゴツカル將軍がソファーから立ち上がりそんな勢いで以って、目の前のテーブルを突いたが何とか踏みとどまったようだ。

「次期国王の紋章で、間違いありませんか」

そう確認を取るサイネリアの手の中には、彼らが捜していた人間だと言う真実が突きつけられている。

絶望にも似た境地からそのペンダントを見たカーネルは、兄の見つかった嬉しさと、その兄の犯した先程の行為、そして何より、サイネリアの言う「死人」という言葉に混乱していた。

「まず、順を追って説明いたします。」

手にあつたペンダントをテーブルにそつと置くと、サイネリアはカーネルを越した床に横たわっているボルマットを一瞥する。皆一様に頷き、サイネリアの言葉を待つ。

「そうですね……。」

では先ず、この男がこの町に現れたのは、約一ヶ月前となります。バレン、と名乗り、この町唯一の貴族の屋敷に身を寄せていました。

「

「この町に住む貴族と言うと……。」

訝しげに呟くゴツカルの言葉には、以外にもひ弱が答えた。

「ラザール伯爵家ですね。この地方では、よく慕われているようです。」

ラザール伯爵に、ラザール伯爵夫人、それに一人娘のマリエ嬢がいらつしやる筈です。

覚えてらっしゃいませんか？殿下。

いつぞや、ボルマット殿下ではなく、カーネル殿下に婚約の申し込みをして参りました、地方貴族です」

以外にも博識な一面を見せるひ弱に、しかしゴツカルもカーネル

も驚いた様子も無く、首を捻っている。恐らく、覚えが無いのだらう。

「いや……」

「地方貴族でまさか第二王子との婚約を望むとはなんと珍しいな、と殿下も仰っていたではありませんか」

「ああ、あの一家か」

ひ弱の言葉に思い当たる節があつたのか、カーネルは頷いた。しかし、王城に上がっていたなど初耳だ。ラザール伯爵夫妻は、出世とは全く無縁で、出世欲も持ち合わせては居ない。

それに、確かに妙な話だ。有力な地方貴族でもなければ、王都や王宮に勤める中央貴族でもない、貴族と言っても、あまり権力もコネもない地方貴族が王家に嫁ごととするなど、端から相手にもされないことは目に見えている。しかも第二王子になどと、言わば身の程知らずとも言える所業だ。

「地方貴族が体面も何もなく王家の一員になろうと言うのだから何かしらの切迫した理由があると思ったのに、一度断りを入れればそれ以上も食い下がらずに妙だと思ったのは覚えているな」

本当に妙だった。引つ掛かりを覚えたのだが、この話にはさほど興味のなさそうな様子のゴツカルが先を促したので、この疑問は後に置いておくとする。

「して、魔女殿？」

「ああ、失礼いたしました。」

話の続きをさせていただいてもよろしいでしょうか？」

横のカーネルが頷くのを見て、サイネリアは話を再開する。

「バレンは、旅で疲れたと言って、最初はたった一晚泊めてくれと頼んだそうです。」

伯爵夫妻もお人の宜しい方々ですから、一晚と言わず、いくらでも泊まって行けと仰られたようで、そのままバレンは何の仕事をするでもなく毎日酒を浴びていましたね」

「……兄上が」

受け入れ難い様子ではあったが事実と受け止めているようで、真実をそうと受け入れられる、広い許容力が見て取れた。

「そのラザール伯爵家の一人娘、マリエ嬢から、私はバレンの死を知ったのです」

マリエ自身が「手を下した」と言っていたことはまだ伏せておいた。

数ある疑問と矛盾点を解明してからでもいいと思っただ。

先ず一つ、本当にマリエが殺したのかどうかなど分らない。女の腕力である上に、いくら地方貴族とは言っても力仕事とは無縁の彼女は、家に閉じこもって研究をすると言う不健康な日々を送っているサイネリアよりも、その力は劣る。果たしてそんな力で一人を殺せるのだろうか。

二つ目、ボルマットの遺体の状況だ。サイネリアが直接死体と化したボルマットを見たのは、マリエを自宅へ送り届けてから一時間前後だが、何故か額には包帯が巻かれ、胸元には小さくいくつもの内出血が浮かんでいた。死因に直接関係があるのかどうかは分から

ないが、無いとも言い切れないと言うのが正直なところだ。鈴蘭の香りも、引つ掛かっている。花を愛でるような男ではなかった筈だ。三つ目、これは恐らく全員が疑問に思っていて当然の点だ。何故、死人が動くのか。なんらかの魔術の類だとは思うが、サイネリアには手に余る。物を操り人形のように動かす術なら知っているが、死者自身が意思を持ち、己の判断で自発的に動く術など聞いたことが無い。これでは、死者を甦らせたことになる。そんなことは不可能だ。魔女や、魔に興味のある者達の、遙か太古より探し求めてきた幻。長い年月を持つ魔女たちでさえ、もうとうの昔に諦めてしまった。そんな術を、一体誰が知り得ると言うのか。

「殿下っ」

焦った様なゴツカル將軍とひ弱の声に、思考の渦から急速に浮上する。

横に座るカーネルを見れば、眉を寄せて瞳を閉じている。身を乗り出す將軍たちを手で制すると、サイネリアはカーネルへと顔を寄せる。

「大丈夫です。お疲れだったんでしょう、眠られているだけです」

サイネリアのその言葉に安堵の溜息を吐いた二人の顔にも、疲労の色が見て取れる。窓を見れば、高い位置で月が輝き、もう夜も更けていることをサイネリアに知らせる。

「今日はこれぐらいにしましょう。お二人は、隣の客室をお使いください。入浴等も、あちらに見えるドアの向こうで済ませられるようになっております」

サイネリアが指し示した途端、ただの白い壁に、金の取っ手と白

いドアが現れる。魔女の館の不思議な様子に目を丸くした二人だが、素直に礼を言っただけだ。

「何から何まで、申し訳ない」

「構いませんわ」

実はずっとある下心を押し隠して、サイネリアは微笑む。

「殿下は、如何なされるのか？」

「大事をとって、今晚一晩は私が傍についております」

「おお、それは有り難い」

ほっとした様に相好を崩すゴツカルに、安堵の溜息を吐くひ弱、寝息を立てるカーネルを見て、サイネリアは良心がチクリと痛むような感覚を覚えた。

——ああ、言えない。実はお金が欲しいんです。だなんて……。

ノルン国唯一の魔女にして、数少ない善良な魔女と人々に認められるヴィヴィッド家は、実は代々、お金が大好きな一族なのである。

眠りへの誘い

「では魔女殿、我々はこれで失礼するがくれぐれも殿下を……」

「重々承知いたしました」

ドサツと音を発ててソファーに沈み込む。捻り上げられた腕はまともに機能しない。力の使いすぎで頭もズキズキと痛んだ。全身の倦怠感はどうしようもない程で、一度弛緩して柔らかい布地に沈んだ体は、最早言うことを利かなかった。

ゴツカル將軍たちが客室へ消えてから一時間、ようやく寢息らしきものが聞こえてきた。

……いや、あれは凄いいびきだ。寢息と言うには、あまりにも凶悪な音がしている。

「スー……」

それに比べて、カーネルのなんと静かなことか。その寢息は静か過ぎて、ゴツカル將軍のいびきに掻き消えている。時々聞こえてくる歯軋りは、ゴツカルのいびきと重なっている。ひ弱のものかと思うと、あの男も実は図太い神経をしているのだなとなく思った。

階段を上がってきてすぐに広がる部屋、階段を上がって正面の部屋の奥に客室への扉がある。右手の壁には浴室とトイレ、そのドアに並んで食器や茶葉を仕舞っている棚。左手の壁の隅にはベッドが置かれ、足が向く方には大きな窓がある。あとは所々にタンスや小

物、それと部屋の中央にテーブルに一人掛けのソファが四つ。これがサイネリアの私室の大まかな間取りだ。

「ふう……」

今寝てしまつては、カーネルに何かあつた時起きられる自信が無い。整理しなければならない事柄も数多く、今日一日で起こつた出来事は、今後のサイネリアの身の振り方にも関わってくるようなことだ。

「うつ」

小さく上がった呻き声にハツとして、言うことを聞かない身体に鞭打つて、ソファの背に預け切つていた頭を持ち上げる。

眉根を寄せてシーツを強く握り締めるカーネルの姿が見えて、どうかしたのかとソファから様子を見る。ベッドまでは到底届くような長い腕も伸びる体も持ち合わせてはいないので、よろよとソファから立ち上がる。

サイネリアがこんなにも疲れているのは、治癒の術でカーネルの身体を治したからだ。ただ治癒の術を行うだけではこんなに疲弊しないのだが、相手が王族であつたことが災いした。神の末裔であるノルン国の王家の血は、魔女の力を擦じ伏せようとする。どんな影響も与えまいと、拒否するのだ。だが、それを上回る力で以つて影響を与えれば、なんとか効く。思った以上にカーネルの血は濃く、王家の人間に初めて術を施したサイネリアは、どっと疲れてしまったのだ。

「殿下？」

なんとかベッドの側に立つて、そつとカーネルに呼びかける。

思った以上に疲れているらしい。声を絞り出すのにも気力が必要。しかも、そうやって苦労して出した声も、掠れていて居た堪れないほどだ。

「……っ」

なおも眉根を寄せて苦しそうな表情をしているカーネルに、サイネリアは溜息を吐きながら、リラックスさせる魔法を掛けようと手を翳した。

「きゃっ」

突然体重が傾ぎ、ベッドの上に転がってしまう。上がった悲鳴はか細く、疲れ果てている身体では、ベッドに寝ているカーネルを下敷きにしないよう、倒れる身体を振ることで精一杯だ。

ベッドの上とは言えど、今のサイネリアにその衝撃は温くなく、頭が鈍痛で支配される。

「つつ」

ぎゅっと目を瞑って、その痛みの一瞬が過ぎるのをじっと待った。

「はぁー……」

細く長い溜息を漏らして薄っすらと目を開けると、不思議に煌めく黒い瞳に出会う。

「あっ

殿下、これは！」

今の状況をいきなり認識して焦るサイネリアだが、「ん？」と声を上げる。

先程いきなりサイネリアがベッドに倒れたのは、何かに引つ張られたからだ。そして、ベッドの上に居る人物は一人。

「殿下、悪ふざけは……」「寝てしまえ。疲れてるんだろ？」

サイネリアの言葉を遮って静かに呟かれた言葉は、サイネリアにとても優しい言葉だった。

暗い所為で黒く輝くカーネルの瞳は、本来は深いバイオレットだ。その瞳が細く、柔らかに薄められる。

「寝てしまえ。このまま」

横向きになつてお互いの顔も至近距離で、サイネリアはどうすればいいのか分らない。正直なところ、研究に浸りきりの魔女に言い寄ってくる物好きなど碌に居らず、畏怖と尊敬に値するサイネリアを口説こうとする男など、本当に皆無だったので、サイネリアには男に対する免疫がゼロだ。

「俺も、この方が安心する」

ふつと笑つて、いつの間にか脇腹に乗せられていた腕に、あやす様に優しく叩かれてしまったのは、疲れも極限に達していたサイネリアには、どうすることも出来なかった。

「おやすみ、美しい魔女殿」

そう言つて優しく額にキスを落とされても、サイネリアは意識を手放す寸前で、おぼろげな意識の中ただその温かい感触にふつと微

笑んだ。

カーネルもそれを見て甘く微笑んで、腕の中にある暖かな感触に、もう冷たい暗闇の夢に追われることも無いだろうと、その身体をぐっと抱き締めて眠りに落ちた。

朝のティータイム

「（あー、今何時かしら？

身体だるー。起きたくなーい。めんどくさー）」

再び目を閉じて、ゴロリと寝転がる。が、何やらスムーズにいかない。

「あッ」

唐突に昨日の記憶が甦ってきて、サイネリアは思い切り上体を起こす。

「いつッ」

疲労からくる頭痛と、昨日ボルマツに捻り上げられた腕が痛んだ。

痛みの酷くない方の左腕で右腕を擦る。

恐る恐る隣を見下ろせば、サイネリアの腹に手を回して安らかに寝息を立てる姿があった。

「（あー、最悪……。

いや、あらぬ誤解を招かない内に、とつと這い出そう）」

起こさないようにそつと腕を除けて、シーツの上に下ろす。が、抱くものを探しているのか、動く腕を見て素早く枕を潜り込ませると、一瞬寄っていた眉間の皺も晴れてまた安らかな寝息を発てる。隣の部屋からは、相変わらず唸り声かと思うゴツカル將軍の鼾いびきとギリギリと耳障りなひ弱の歯軋りが聞こえてくる。まだ外は薄ぼん

やりと紫がかつた空が広がり始めた時間帯で、昨日色々あった皆は疲れているだろう。まだ一、二時間は起き出して来ないはずだ。

そつとベッドを軋ませて降りると、思っていたより疲労が残っていたのだろう。ふらついてしまった。なんとか踏み止まると、サイネリアは階下を指指して階段へのドアを開ける。音が鳴らないようにそつと開け、そつと閉めて階段を下りていく。

「（あー、厄介ごとに首突っ込んだなあ……。めんどくさっ）」

内心で吐き捨てて、サイネリアは机の前で止まる。

二階の内装とは打って変わって、ゴチャゴチャと意味不明なものが散乱している。ホルマリン漬けの異常にでかい目玉だとか、何かの生き物の頭蓋骨だとか、不自然な色をした液体だとか、とにかく所狭しと散乱しているのだ。

「うーん、汚い」

小さくそう呟くも、片そうという気配は微塵も無い。

おもむろに目盛の書かれたガラス瓶を手に取ると、素早くその中に色々なものを混入していく。

「（シルフの涙、カラスの歌声、唐辛子のヘタ、澄んだ水、蝙蝠の耳の欠片）」

完全に口には入れられないようなものを次々と混入していく様は、人々に伝えられる、魔女そのものだろう。背中まで伸びるプラチナブロンドと、澄んだ瞳、通った鼻に、綺麗な形の瓜実顔つりぎねがめ、唇には紅などひいていないのに不思議と赤いと言う、魔女らしからぬ外見を除けば、だが。

その美貌は、最早神の創造物と見紛う程で、サイネリアを畏怖と尊敬の対象に仕立て上げた要因の一つでもある。

「よし、これでいいか」

最後に薰り高い紅茶の茶葉を入れて、ポットに移す。それを火に掛けて温めると、とても美味なる紅茶が出来上がるのは、魔女の知恵と言ったところだ。作る工程を見ている人間が口にできるとは思えないようなグロテスクなものが数多く入っていようと、とても美味なのだ。そして疲労回復作用に、強壮作用もあり、疲れたときにはこれを飲むのが一番である。

空腹感も感じなくなるので、料理が面倒なときにはうつてつけ。

「（四人分の朝食作るなんて面倒だしねー）」

この紅茶もときは、魔女の作るレシピが秘密の薬、つまり魔女の秘薬な訳である。魔女の秘薬とは、魔女にしか作り方の分からない薬の総称で、多くの薬がある。その一つ一つに一応の名前があるが、魔女以外の人間の前では「魔女の秘薬」としか言わない。それ故に人間たちは魔女の秘薬とは、魔女の作る万能薬で何にでも効くと思っているはずだ。そんな奇跡の薬となれば、人間達は手出しをしようとしなない。だが、一つ一つにレシピがあればどうだろう。欲深な人間達は、必死になってレシピを集めるだろう。それは要らぬ争いを招く。それ故に、魔女の作る薬は全て「魔女の秘薬」とされ、神秘性を増しているのだ。

「いい香りだ」

背後に聞こえた声に、驚いて振り返る。

「おはよう」

カーネルが柱に寄りかかって声を掛けてきた。
シルフの恵み、と呼ばれるこの薬を作り始めてから、まだ三十分も経っていない。

少し動揺したが、なんとかそれを押し隠して素っ気無く頭を下げる。

「おはようございます、殿下」

そして向きをまたポットに戻して、火を止める。蓋を開けて中を見れば、有り得ない色をしていた紅茶もどきはとても綺麗な琥珀色へと変わっている。顔を近づけて香りを嗅ぐと、上手くできているようだ。

「それは、紅茶か？」

「ええ、そのようなものです」

背後から顔のすぐ隣ににゅっと伸びてきたカーネルの顔は見ないようにして、冷静になろうと自分に言い聞かせる。

「違うのか？」

背中にはカーネルの身体が当たっている。己の顔のすぐ横にはカーネルの整った顔が見える。

「（綺麗な顔）」

特に人の顔の良し悪しになど興味のないサイネリアだが、カーネ

ルの顔が非常に整っていることは分かる。

これが世に言う見惚れる、と言うことなのだろうと察したが、どうにかそれを押さえ込み、カーネルを避けて踵を返す。ポットも忘れずに持つと、不自然なほどの足の速さで歩いて二階への階段を上り始める。

後ろから響く足音に意識が向くのを悔しく思いながら、私室へのドアを開ける。

「それは、魔女の秘薬か？」

好奇心に輝く目で以ってそう聞かれても、はいとは答え辛い。

「ただの疲労回復に効く紅茶ですよ」

ポットをテーブルに置いて、腰掛けようとするが、カーネルの隣は是非とも遠慮したいので、カーネルが座ってから腰掛けようと思い、口実にティーカップとソーサーを棚から出しに行く。

相変わらずの酷い躰いびきと齒軋りに、まだ寝ている人間二人は無視して、自分とカーネルの分だけ棚から取り出す。そしてテーブルの方を向けば、カーネルは此方を見たまま立っている。居心地の悪さを感じながらも、

「どうぞ、お掛けください」

とソファアを勧める。そもそも、王族よりも先に座ろうとするなど無礼にあたるというのもあってそう声を掛けたのだが、返ってきた返事はありがたくないものだった。

「紅茶は俺が淹れよう。
座ってるといい」

好意を無碍に断ることも出来ずに、渋々サイネリアは腰を下ろした。ティーカップに紅茶を注いで渡してくれたのは有難いが、当然の様に隣に腰を降ろされて、サイネリアは溜息を飲み込んだ。

その後一時間、ゴツカル將軍たちが起き出すまで、サイネリアは心臓に悪いカーネルとの会話を続ける羽目になったのだった。

本格的に突っ込んだ

「これは魔女の秘薬ではないのか？」

「ただの疲労に効果のある薬ですよ」

「しかし、空腹感がなくなっただが」

「よほど空いてらしたんでしょう、そう言う時は少しの量で満腹感を感じることもございますので」

「なにやら紅茶の茶葉の前にも、投入していたのは？」

「……薬の材料ですよ」

「冷氣のようなものが見えたんだが？」

「……」

思わず額を抱えそうになる。

この王子はお飾りでも、ほんくらでもない。頭の回転は良いし、己の魅力を熟知して行動している。

肩に切りそろえられた金の髪が煌めく角度も、バイオレットの深い瞳の神秘的な美しさも、整っている顔の造作に浮かべる蕩けるような笑みも、均整の取れた身体に滑らかな肌が織り成す色香も、きつと全て分かっているのだ。

分かっている、和らいだ表情で無邪気にそんなことを聞いてくる。だが、答えられる訳が無い。魔女の掟にも等しいものを、簡単に口には出来ない。思わず頷きそうになるが、なんとか堪えた。

「…殿下は、何故ボルマツト殿下をお捜しに？」

このままいけば、王位は殿下のものとなります。なのに、何故ボルマツト殿下を連れ戻そうとなさいます？」

話題の転換をと、カーネルの興味を引きそうな話を振る。

「兄弟がそうするのは、おかしいか？」

「いいえ」

首を横にふる。

真摯なカーネルの瞳に、魅入られる。

「王族として生まれたと言うだけで、俺達はどこまでも兄弟だ。醜く争い、足の引き摺りあいやこけ落としをする宮廷という、ひとつの社会を見てきた。

宮廷は、人の醜い欲の渦巻きを、縮小したものだと思うんだ。権力も、富も、名誉も、それは人の生み出し積み立ててきた財産だが、同時に人を魅了して止まない。

魅力は人の醜い部分を、簡単に引きずり出す。国の象徴、そんな魅力に溢れた場所なんだ、欲が溢れるのも当然と言うもの。

人の醜い本性の、縮図のようだと思うよ。このように、外に出ると尚更」

「そうですか」

ただひとこと呟いて、サイネリアは穏やかな気持ちで目を閉じる。魅力。富、名誉、権力、金、きつとあらゆるものを指すのだろう。それは人にも言えることで、カリスマ性に魅せられると言うことは、

その魅力にとり憑かれるということ。すなわち、善悪やあらゆるものの判断基準を、曖昧にしてみようとすることだ。

それを否定もせず、肯定もしないまま、そこに有ることとして述べたカーネルに穏やかな気持ちになる。

「……………それだけ？」

「何が？」

問われるとは思いつきもなかったサイネリアは、思わず敬語も忘れて返してしまった。

「いや、そうじゃないとか、そのとおりだとか、何かあると思ったんだが」

「はあ、他人の考え方をどうこう言って、何の意義があるんです？」

「……………国の大臣たちは、そうやって自分の考えを王に述べるのが仕事だぞ」

「……………」

サイネリアもカーネルも、お互いの顔を見て暫く沈黙する。

カーネルの口元がふよつと蠢いたのを見て、サイネリアも思わず目元が綻んだ。お互いふつと笑って相好を崩すと、少しの間笑う。

「カーネル・ウン・ゲイリアム・メノン

メノン国王家第二王位継承者、及び第百二十七代目国王第二嫡子として、現在は国政に関わっている」

いきなりサイネリアを立たせてテーブルとソファアの傍から移動して障害物がないスペースに来るやいなや、改めての自己紹介のつもりか、丁寧にお辞儀をするカーネルに習って、サイネリアも恭しく頭を下げる。

正直、王の威厳とはこれを言うのかもしれないと思った。

圧倒的な存在感、相手を屈服させるに値する威圧感、それらはカーネルの自信によってさらに溢れんばかりだった。

「サイネリア・パルケット・ヴィヴィッドと申します。ヴィヴィッド家十代目にございます。」

王家より賜りました、善き魔女の呼び名により、人々と恙無く生活させていただく身にございます」

一二七代続く王家に対して、ヴィヴィッド家は、サイネリアで十代目。魔女と人間の寿命の差がありありと窺える。

「ではサイネリア、王家にはまだその身は預けているということか？」

少し高い位置にあるカーネルの瞳は、サイネリアを見定めているようだった。

「ヴィヴィッド家は、代々そうしてお仕えして参りました」

「では、これからはどうなのだ？」

そう言うカーネルの瞳からはふざけた雰囲気はなかったが、どこかこのやり取りを楽しんでいるように窺えた。

「それは……」

少し足踏みしたサイネリアを鋭く見抜き、

「望むものを、約束しよう」

そう言ったのだ。

魔女にも望めないものが、王家と言えども人間の手に入れられるわけが無い、きっと誰もがそう思うのだ。サイネリアだとて、思わないわけではない。だが、カーネルはそんなことは百も承知のはずだ。この王子は、お飾りではないのだから。

サイネリアは、その場に跪く。手を祈るように組んで、片足を立てて、目をそつと伏せる。

「仰せのままに、お仕えいたします。

カーネル様」

——ああ、これで、平穏な暮らしとはおさらばかしら。

それでもどこか、胸躍る自分が居たことは、サイネリアの半分空いている心臓のスペースにそつと仕舞う事にする。

本格的に突っ込んだ(後書き)

ちよつと厄介な菌に侵されまして、寝込んでおりました(´・ω・
)

更新が遅れて、本当に申し訳ありませんでした!!!!+・(P
、。q)。。+

要らぬ詮索

跪^{ひざまず}いて頭を垂れつつも、サイネリアは思うところがあった。

「（ヴィヴィッド家に代々渡されてきた報酬^{しらべ}つて、いくらぐらいかしら？）」

サイネリアのお金好きは、ヴィヴィッドの“血”によるものが大きい。おそらくサイネリア本人も好きではあるのだろうが、本来魔女とは物欲が薄く、探究心が旺盛な学者肌や研究家の気が強いものだ。そんな魔女であるサイネリアがこうも金欲が強いのは、ヴィヴィッドと言う家系によるものだという。

ヴィヴィッドと呼ばれる前、魔女が世界に散り散りになるずっと昔、魔女達が一つの家族であった時代。ヴィヴィッド家の先祖に呪いが掛けられたとも、その血の“性質”だとも言われるが、ただ確かなことはヴィヴィッドの家系は「金銭」というものに対する執着心があると言っただけだ。

母も、母の母も、その前も、ずっとそうだったと聞いている。「そんなもののなのよ」そう聞かされてきた。幼い頃は、周りの魔女たちとは違い、「変だ」と思っていたが、時が経ち言い聞かされ続けて今では「そういうもののなのか」と思っている。

そんな血を持つ魔女の家系が今まで仕えてきた王家なのだ、絶対報酬があつたはずなのだが母からはそんな話は聞かなかつたし、魔女を嫌っていた王家に、そんな記録が残っている線も薄そうだ。金に執着する醜い人間達を見ると、自分もあなのかと自己嫌悪に陥る。それが嫌で、サイネリアはしかるべき報酬以外は貰わないと心に決めているのだ。よって、これは重要な問題といえる。

「で、魔女殿の望むものは何だ？」

知れず考えに耽っていたサイネリアは、はっとして顔を上げた。

「ッッ」

そして、思わず仰け反る。

「（近い近い！！）」

思わず近くに迫っていたカーネルの顔を避けると、カーネルは首を傾げる。

「なんだ？」

「……御戯れは」

サイネリアが困り果てて少し眉根を寄せると、カーネルはさらに顔を近づけてくる。仰け反りすぎて思わず後ろに手を突いて、これでもかとあからさまにカーネルから逃げようとする。サイネリアの反応から、おそらく男に対して免疫がないと分かっているだろうに、楽しくて仕方が無いとでも言うように瞳を輝かせてにじり寄ってくるのだ。

ついにサイネリアは絨毯の上に尻をついてザカザカと後ろへ後ろへと後退していくのだが、優雅に後ろ手を組んだままカーネルは一步步を簡単に詰めてしまう。

「（なんでそんなに優雅なのよっ）」

キラキラとした光が見えるのは果たしてサイネリアの気のせいなのだろうか。

トンツと、背中に硬い感触が当たる。狭くはないが制限のある部屋なのだから、いつかはこうなるとは分かっている、考えたくはなかった可能性にぶち当たってサイネリアはぎゅっと眉根を寄せて瞳に力を込めた。

「……この美しさと魔女だと言う肩書きに、そんな筈もないと思ってたんだが」

サイネリアを壁に追い込んで、相変わらず腕を後ろに組んだまま上半身を折って身を屈めると、サイネリアとカーネルの顔は目と鼻の先だ。

思わずビクリを肩を揺らして身を強張らせると、その反応に少し目を見開いてサイネリアを怯えさせないようにそっと身を離す。

「……生娘？」

処女だ。そうだ何か悪いのか。

「そもそも、魔女は知識欲以外の欲がとても薄いものですからまあ……例外的に色欲の強い魔女もおりますが」

ヴィヴィッド家のように、何らかの欲を持つのは、やはり家系だ。ヴィヴィッドが金欲ならば、色欲の魔女も存在するし、食欲の魔女も存在する。

「その一族毎に特徴があるのか？」

気遣うように一歩後ろへ退いた瞬間、すかさずサイネリアは立ち上がり横へと四歩程度距離を取る。サイネリアのその反応にカーネルは気分を害した様子も無く、肩を竦めた。

「で、どうなんだ？」

距離を取ることに一杯一杯だったサイネリアは、意識の外にあった質問を再度促されて口を開く。

「……ヴィヴィッドの一族は、金欲きんよくです」

言いづらそうに目を逸らして、ボソリと呟く。

だが、これで言いあぐねていた報酬を、察しのいいこの王子は理解してくれるだろう。

「金きん……」

黄金ではなく、通貨と言ったこと？」

「そうです」

もうここまで言ってしまうえば腹も決まり、むしろ開き直ってそう答える。……やけくそとも言わないでもないが。

「そうか、どの程度の報酬が望みなんだ？」

魔女が望む金額など見当もつかないのか、もしも巨額であったならとの心配からカーネルは国庫予算を頭に思い描く。

「私にもさっぱり……」

困ったように首を傾げるサイネリアを見て、またいじめてしまいたい衝動に駆られたのは顔には出さず、カーネルもサイネリアに釣られて首を捻る。

「お国の帳簿に、残ってはいないかと考えていたのですが」

望み薄だとは思うが一応口に出してそう言えば、カーネルは納得したように頷いた。

「確認してみよう。」

だが、それは全てこの件が片付いてからの話になると思うぞ」

後払いだと言われて、サイネリアの肩は落ちそうになるが、今までもそうだったと思い直して頷いた。

「承知いたしました。」

この案件、迅速に片を着けましょう」

——お金——！！

燃える闘志はやはり下心満載であった。

要らぬ詮索（後書き）

やはり最近体調を崩しがちで、外にも満足に生けていない状態が続いています（´・ω・｀）

どうか、更新の滞りはご了承くださいと思っています。

出発（前書き）

長くなってしまうて申し訳ありません（・ω・）

出発

「良い天気ですな」

「……そうでございますね」

非常に気まずい気分を味わいながら挨拶を返す。

サイネリアが闘志を燃やし始めた瞬間、すなわち二人の会話が一段落ついた瞬間、ゴツカル將軍とノーク（やっと名前を聞いた）の喧しい^{やかま}騒ぎと齒軋りがいつの間にか止んでいるのに気がついた。

かと思えば「お邪魔でしたかな？」とニヤニヤ顔のゴツカルにまだ眠いのかカクンカクンと頭が舟を漕いでいるノースがドアの隙間から覗いていて、いつから見ていたのかと問い詰めた気分が陥ったが後悔しそうなので止めておいた。

……ノースの首が有り得ない方向にグラグラと揺れていたのは見ないことにしたが。

「この紅茶、良い香りですな」

「おいしいですねえ」

向かい側のソファーに並んで座る二人はサイネリアが調合した、シルフの恵みにほくほく顔だ。その顔を見て、サイネリアも知らず笑顔になる。

「ようございました」

につこりと微笑むサイネリアに一瞬ゴツカルはポカンと口を開けて慌てて咳払いをし、ノースは目を見開き眉根を寄せて口をタコの

ように窄めて奇妙な顔をしている。なるほど妙な反応だ。これではいくら王宮勤めであろうが華のある浮いた噂などないはずだ。

「魔女殿」

その空気を破るような少し緊張の混じった声音に、一同は共通の主に見線もたらを置いた。

自分が齎もたらした緊張が、予想外だったのか少し声音を緩める。

「ああ、いや、將軍たちは食事を続けてくれて大丈夫だ。」

食事と言っても紅茶もどきなので、話を聞きながら口にする分には問題にもならないだろうと將軍たちはそのままシルフの恵みをちびちびと飲み足していく。

「なんででしょうか？」

横のカーネルを見て少し首を傾げると、カーネルは少し咳払いをして疑問を口にした。

「兄上のことなんだが、今どんな状態だ」

少し目を伏せてそう言うカーネルの膝に置かれて組まれた手は関節が白む程に力が入り、聞きたくない事に対する無意識の恐怖からは少し声が掠れ、冷静であろうと無理に作った無表情はしかし隠し切れなかった苦痛に少しだけ眉間に皺が寄っている。

カーネルは、先程「兄弟」だと言った。それは王族にありきな歪んだ兄弟関係ではなかったのだろう。二人の間には確かな絆があり、カーネルはそれをとて大事に思っていたのだ。いや、今も思っているに違いない。そしてそれはすなわち、ボルマツト自身に対する

愛情と比例する。

ボルマツトが昨夜犯した愚行に、カーネルも受け止めがたい現実だと分かっているのだろう。それ故に痛む心だが、王族の義務として、何より兄を救う為、兄の状況を把握する必要があった。

「……ボルマツト殿下は、もう既にお亡くなりになっています」

サイネリアもカーネルを傷つけることを承知でその事実を口にする。

「そうか」

目を閉じてその事実を受け止めたカーネルの手は、自分の爪が食い込んで鬱血した様に変色していた。

その手にそつと指先を這わせると、カーネルはふつと目を開けて俯けていた顔を上げるとサイネリアを見る。サイネリアが少しだけ目を伏せると、カーネルは手の力を抜いて強く組んでいた手をやっ

と解いた。

それを見てサイネリアはカーネルから指を引く。

「ボルマツト殿下が昨夜動かれたのは、何らかの術によるものだと思います。」

一言もお言葉はお聞きしておりませんので意識がご本人のものか、それとも他の誰かのものであるかは分かりません。

現在は小瓶の中でお過ごしですよ」

サイネリアの最後の一言に首を捻ったカーネル達は、サイネリアが指した方向へと目を向ける。寝台の傍に置かれたデスクチェアの上にポンと置かれている小瓶。

その半分が不透明で、半分程中身が入っていることが分かる。

カーネルはソファアから立ち上がってその小瓶へと近付いて行く。屈んでその中身を見ると、硬直した。

「……これは」

「どうかなさいましたか」

カーネルの様子とサイネリアの発言に、ゴツカルとノースも立ち上がって小瓶へと近付いていく。

「これは……ッ」

「こんなことまで出来るんですねえ」

三人の視線の先には、横たわったボルマツトが居た。
小瓶の中に、小さな、ボルマツトが。

「生憎と狭い家ですから、これ以上はお客人にお貸しできるスペースはありませんでしたので」

死んだ人間にベッドを貸すのも嫌だし、絨毯に転がしておくのも気が悪いので、昨夜のうちに小さくして小瓶に入れておいたのだ。いつ動くとも知れないので檻の役目も込みである。

「兄上は、死んだのか」

疑問ではなく、確認の声だった。自分自身が間違いなくそう認識しているかの、確認の言葉。

サイネリアはソファアに座ったままで、見えるのはカーネルの背中のみ。その広い背中とは、とても頼りなく見えた。悲しみの色に染

まる。

「はい」

自分自身の確認に返事が返って来たことが意外だったのか、カーネルが振り返る。サイネリアはカーネルの顔を真っ直ぐに見返す。

「殿下」

何を言おうと言っのか、自分自身よく整理もついていないのに、勝手に口が動く。

「この国は豊かです」

サイネリアの声に、ゴツカルとノースも振り返る。

「ですが、豊かである故に、大きくある故に、統治者が必要なのです。」

それはボルマツト殿下であつたのかもしれませんが、ですが、ボルマツト殿下は、もうこの常世にあらざるお方。

カーネル殿下、

お治めください。」

カーネルの喉が、渴きを訴えるようにコクリと動く。

「この国を、国の民を、この国の大地を、この国の、全てのものを、この国を統べり、お治めください。」

戦なく、餓えず、日々の糧のある国を、御造りくださいませ」

酷な事を、言っているのかもしれない。

兄の死よりも、まずお前にはやることがあるだろうと、そう言っているようなものだ。

「民がこの国に生まれてよかったと、誇りを持ってその今を生きられるように。」

何れ来る將軍殿の家族が、安心して子供を持てるように、何時ぞや訪れるノース殿の恋が、身分や貧しさに潰れない様に、他国により決して、民が虐げられることの、ないように。

雨風を凌ぐ屋根の無い暮らしを民に強いまするな。

母の乳が無く儚い命が散ることを許しまするな。

払えぬ税に首を撥ねられる農夫を作りまするな。

決して、この国を、見離しまするな。」

貴方には、この国の、四千万の命が掛かっている。

この国のすべての重責を、背負う運命にある。もう後戻りなどできないのだ。もう王家の血は、正当な継承権は、もうカーネルにしか残っていない。もうこの国を支えられる器は、カーネル以外に、残ってはいないのだ。

受け容れよ、己が過酷な運命を。

「本来の王が倒れたのは、カーネル様が王になるべくしてそうだったのかもしれない。」

そうならば、決してその命を軽んじますな、無になさいまするな。その命も、祈りさえも背負って、成し遂げて御覧なさい」

「兄上の死が、なるべくしてなったものだ？」

身体の両脇できつく握られた拳が、怒りと遣る瀬無さにブルブルと震えた。

「そうでなければ、一体何になら納得がいくと仰られます？」

兄上の死には、何の意味も無い方がよろしいですか？その方が兄上を慕っている自分に、長く陶醉することができますものね」

冷たく、残酷な言葉はカーネルを翔る。

そして、怒りという気力が、全身から漲ってくるのをサイネリアは感じた。

なんと圧倒的な、恐ろしく、美しい……。

やはり、カーネルの内に眠るものは、小さな器ではないと確信する。

「俺を、侮辱しているのか……？」

静かに、低く響く声はサイネリアの鼓膜と心臓を、容赦なく震わせる。

怒りの激しさに比例せず、ゆらりと立ち上る静かな炎が、カーネルの怒りと、哀しみの深さを表しているようで、サイネリアも負けじと瞳に力を込める。

完全にサイネリアに振り返ったカーネルが、一步一步、絨毯に音が吸い込まれているのにも関わらず、サイネリアの心臓はその足音をまるで代わりだとも言うようにリズムを刻んだ。大きく、激しく、そして重く。

「そうお取りになっても構いません。

ですが、ボルマツト殿下の死に意味があつたのなら……」

真つ直ぐに、己の前に立ち止まった主を眼に映す。

さあ、貴方の時代の、初まりよ――

「それは、カーネル様。

貴方の為であることでしょう」

そう、貴方のせい、ではなく
貴方の、為。

肉親の絆で強く結ばれた、身体が弱く周囲より軽んじられ、内に持つ力故に敬遠された、孤独な人間だったであろう彼を慕い、これ程までにその死を悲しんだ、貴方を導くための。

彼は、死によって、貴方を導いた。

そう考えて。

きつと、貴方なら、その死をとて大切に、するだろうから。

「……ああ、そうだな」

サイネリアの琥珀に近い瞳は、雄弁に真意を語る。

ふつと緩んだサイネリアの瞳に、カーネルは悟る。己のやるべきことを。

「（国を、すなわちこの国の全て。

大地を、そして民を統べよ……か）」

キュツと握っていた拳を解いて、力を抜くように首を上へと仰向ける。

天井は、白かった。窓からの光は、まぶしかった。目の前の女神は、輝いて見えた。

「ふうー……」

前へと頭を預けて、長く息を吐き出す。

もう、下を見ることは出来ない。常に、前を、見ていかなければ。

「私達^{わたくし}が、おります」

優しく響くその声に、顔を上げると、とても優しく微笑む女神の顔^{かんばせ}が飛び込んだ。

ゴツカルとノースを振り返れば、二人の瞳は輝き、主の覚悟に心からの歡喜を訴えた。

奮い立つ心は、カーネル自身の身をも震わせる。

「……さあ、国創りだ」

「はい」

「承知ッ」

「了解しました！」

穏やかな女神の支え、頼れる漢^{おとこ}の返答、知識の宝庫の張り切り。
バイオレットの瞳に宿った光、それは、きつと本来の色であろう。

出発（後書き）

今回は筆がノッてノッて。

物凄く長くなってしまう……（´・ω・´）

やっとここからが私の書きたかった話への突入です！！（´・艸・´）
、。、

ここまでお気に入りに登録してくださった皆様、閲覧くださった皆様、有難うございます+。（P A。q）。+
とても励みになります（´・艸・´）。、

では、次話にて！！（o・・o）ノ）

只今移動中（前書き）

長くてすみませんすみませんごめんなさいああああああああ

只今移動中

流れていく景色を、サイネリアは窓枠に頬杖を突いて眺めていた。ガタンと大きく揺れて、クッションがあるといってもその下はただの木の椅子であるから、沈み込んだ瞬間に強かに尻を打ちつけた。いい加減この状況にも飽きて、^{もとい}基尻はもう限界に達していて、サイネリアは苛々と爪先で床を叩いた。

「……馬車は初めてみたいだな」

「ええ、まあ」

言葉少なにそう返すが、顔の向きは相変わらず窓の外の景色に向けて、正面が空いているにも拘らず何故か隣に座るカーネルを見ようとはしない。

現在地、ノルン国首都グリフェン郊外。

状況、カーネル及びサイネリア、ゴツカル及びノース及びボルマツト入りの小瓶の、二手に分かれて移動中。

心境、非常に不満。

「殿下、私がお運びしてもよかったですよ」

輝く微笑の背後から立ち上る不機嫌なオーラが見間違いであることを祈りながら、カーネルは冷や汗を垂らす。

「力の使いすぎは疲れるんだろう？」

「……」

凶星を指されて押し黙ると、ほらとでも言わんばかりにカーネルが肩を竦める。

「まあ移動が自由自在な貴女からすれば不便だろうが、たまにはその不便を知るのもいいだろう」

「……」

再びそつぽを向いて溜息を吐く。

「（……こうなることも有り得たはずなのに、考えてなかったッッ）」

「

悔しく思いながらも、今サイネリアがここに居るのはとても自然な流れのはずだった。

「兄上の葬儀をする。

就任、戴冠式はその後だ」

「そうですね。

ですが、いつまた動くとも……」

「この小瓶に入れておいたら大丈夫なんでしょう?？」

「ええ、動いても非力な力では到底やぶれませんし」

「では、都に帰るとするか」

「あ、王子、カモフラージュに棺桶を持っていきましょう。

大臣辺り、王子がボルマツト王子を暗殺して帰ってきたとか言い
がかりつけそうですよ」

「ああ……そうだな

だが、棺桶に入れたところでどうする？

確実に俺が殺したのではない、と言う証拠がなければ一緒だぞ」

「そうですな……。むーん……」

「あら、それならうちの骸骨君を持って行つては如何でしょう？」

「骸骨くん、ですか？

なんです？それ」

「言葉の通りですよ、ノース殿。

先日友人に蹴り飛ばされて少々分断しておりますが、偽造ならお
手の物でございますよ」

「……どう言う意味だ？」

「殿下が都をお出になったのは何時でございますか？」

「一週間前だな、丁度」

「もうそんなに経ちましたかッ

城の皆にはご病気だと伝えておりますが、見舞いにかこつけて、

そろそろいらぬ輩が王子の面会を求めてくる頃ですな」

「うわあ、面倒ですねえ」

「死体の状態が悪ければ、一週間前に城を出たカーネル殿下を疑うことなどできませんわよね？」

「……要するに、俺が兄上に接触できる可能性が無い時期の死体の状態を、再現するということか？」

「ええ、そこは魔女の領分ですわ。
お任せくださいませ」

「……た、楽しそうですね」

「うむ、何よりだ」

「ああ、研究馬鹿なんだな、きつと……」

と、言う訳で、何の役に立つのかと思っていた、死んだ後の人間になりきることが出来るという魔術の掛かった、母の作った骸骨君は、ゴツカルとノースの乗る馬車に縄で引かれている荷台の棺桶に納まっている。

もしかすると、母はこんな時を想定して作ったのかもしれないな、などと考えて、やはり敵わないと苦笑した。

「なんだ？」

サイネリアの肩が震えたのを目ざとく見つけて、先程まで不機嫌極まりなかったのにどうしたのかと不思議らしい。

「いえ、何でもありません」

「？」

「そうか」

言及することもなく、やっとこちらを向いたサイネリアの顔を満足気に眺める。

「ところで殿下」

「なんだ」

「私は飛んでゆけますか？」

「いや、知っているが」

「……」

「……」

無言の間に火花の散る音がする。

カーネルはどうしても譲る気は無いらしい。かと言っても、サイネリアもいい加減尻が痛い。窓枠に突いていた肘も、大きな揺れにずっこけて思い切りすって痛かったし、窓に近い位置に居たおかげでくねる山道に翻弄された上に額も窓にぶつけている。正直、もう

体中痛いところだらけだ。

「ああ……」

赤くなつた額や時々浮かす腰にカーネルは察しがついて頷いた。

「ならこうすればいい」

「は？ いきやああ」

思わず微妙な悲鳴を上げる。

「（ああ、デジャヴだわ……）」

腕を引かれ、思い切り倒れ込む。横にいるのは当然カーネルで、その膝に頭をぶつけるかと瞼をギュツと瞑れば、身体がふわりと浮いて、座らされた。

そつと目を開ければ面白そうに輝く紫の瞳に出会つて、サイネリアは硬直する。

「つつつ」

「はは、軽いな」

いやいやいやいやいや、そんな感想は求めてません必要ゼロですとにかく降ろしてえ！

言いたいことを内心で一言で叫んでしまった。

「こうしてれば身体は浮かないし、額はぶつけないし、手を壁に突いて踏ん張らなくていいだろう？」

笑いながらそう言われて、サイネリアは言葉が詰まる。

サイネリア一人だけでも空を飛んで付いて行けばいい話だとか、何でわざわざ隣に座っているんだとか、言いたいことはあるのに、サイネリアは諦めたように言葉を込み込んだ。

「（ちゃんと笑ったの、初めて見たんですもの……）」

サイネリアの諦めを悟って、カーネルは益々上機嫌になる。

もぞりと動くサイネリアに逃げる可能性を危惧して一瞬力を込めたが、呆れた様にカーネルを見るサイネリアに少し疑問を抱きながらも好きにさせると、正面ではなく背中を向けるだけで、カーネルの膝からは降りなかった。

「（ああ、なるほど。」

照れているだけか）」

背中を向けたのは確かに羞恥からだが、最初に嫌がったのは絶対それだけではないのに、カーネルは都合よくそう解釈して納得する。サイネリアの顔が見られないことは、非常に、非常に不満そうではあったが、これ以上を望んで逃げられては元も子もないと言い聞かせ我慢する。

「美しい髪だな……」

優しい月の色だ」

サイネリアの後ろ髪を一房掬い取って口付ける。さらさらと零れ落ちていく髪は一本一本が細く、窓から入る光に煌めいている。

腰上まで伸ばされた髪は下ろしたままで、女性としては少々はしたないと取られそうなものだが、サイネリアの髪は絹糸のように柔

らく風に靡く。そんな髪をはしたないなどと、思う訳が無かった。むしろ今この手に触れていることが奇跡のような、神聖な気持ちにさえさせられる。

「太陽の光を照り返して、まるで星のように瞬く」

カーネルがお得意の麗句を囁いても、サイネリアからは何の反応もなかった。いつの間にかサイネリアの身体からは力が抜けていて、その身をカーネルに預け切っている。

警戒するべき対象の、男、である自分に身体を預けるとはどうしたのかと考えたところで、その事実には肩を落とす。

耳を擦っても無反応どころか、摺り寄せてくるような反応に、カーネルは確信を持ってサイネリアの顔をそっと覗き込む。

「すー……」

とても静かな寝息に、カーネルは脱力しかける。

「大人しいと思えば……」

が、悪くない。

少し首が痛くなりそうだが、覗き込めば存分に彼女の顔を拝めるのだ。

肩にサイネリアの頭がカクンと傾いで、下を見下ろせば女神の顔^{かんばせ}が目に入るようになる。器用に動き、カーネルは昨夜と同じように恭しくサイネリアの額に口付け、昨夜と同じ言葉を囁く。昨夜囁いたそれよりも、敬いと、愛おしさを込めて。

「おやすみ、美しい魔女殿」

夢うつつに暖かな何かに包まれる心地よさの中、額に落ちた一瞬の温もりと、ずっとあつた髪を撫でていく何かの心地よさに、サイネリアはふつと微笑んだ。

只今移動中（後書き）

激甘！！！！

え、そうでもない？

いや、私の書く話でこんなに甘いだなんてっつう、うっうっうっ……な、何か涙でてきたぞ……

ん？あれ？読み返したら、何か長く……あれ？？いや、見ないことにしよう。うん。

読んでくださった皆様、ありがとうございました！（o・o）
ノ（）

主従関係の謎

「ああ、棺は然るべき場所へ頼んだ。

ゴツカル將軍とノース補佐官を送り届けて差し上げてくれ。

こちらのご婦人は私の客人だ、失礼の無いように」

「承知いたしました」

素早く命令を飛ばすカーネルに、ふくよかな女性は恭しく頭を下げる。女官長だと紹介された女性は、おっとりとした優しい雰囲気醸して、母性というものを思い起こさせた。

女官長の後ろに控える女官たちもカーネルの帰還に喜びを伝え、与えられた仕事に不満どころか笑顔さえ見せて仕事を始めた。

「私、ですか……」

見下ろせば胡散臭そうな薄茶の瞳に出会って、カーネルは苦笑する。

「女官長には幼い頃から世話になっているからいいものの、他の女官の前ではそうもいかない」

「いつでも礼節を重んじなければいけませんものね。

王族も難儀なものです」

女官に呼ばれた衛士が黒い棺を運ぶ様子を眺めながらそう言えば、カーネルはまた違うことを口にした。

「ここに呼んでるのは、口の堅い者ばかりだ。

俺が病気でないことは、端から知ってる。女官長なんかは羽交い絞めにするほど止めてくれたな」

それはそうだ。大事な大事な跡取りが単身兄を捜しに行くなど、なんと危険なことか。

それに、心配でもあったことだろう。先程やつと帰城を果たした時など、息を切らして駆け寄ってきたかと思えば涙ぐんで「おかえりなさいませ」と言ったのだから。幼い頃より成長を見てきたと言うのだから、息子のようにも思っているのかもしれない。

「よい人たちに、恵まれましたね」

棺を見送っていた薄茶の瞳が優しい色を湛えて、カーネルを見上げる。

優しく琥珀に輝いて、カーネルの視線を逃がしてはくれない。華の様に微笑む正体不明の美女と、それを見つめる美しい王子。周囲が不思議に盗み見するのに、カーネルはサイネリアを見つめすぎて気付かず、羨望の類の視線にはその美貌ゆえに慣れてしまっているサイネリアも気付かないので、周囲は「二人の世界を作るほどに仲睦まじい」と更に思い込みを深めることになった。

「カーネル様

お客人のお部屋の準備、整いましてございます」

その一言でやつとこちらの世界に戻ってきたカーネルが、ニヤリと笑った。

「ああ、全て不自由のない様に取り計らってくれ。
随分とお疲れのようだからな」

ニヤニヤとしながら呟かれた一言は、サイネリアにとっては爆弾である。

「王子、間もなく帰城いたしますぞ」

「……」

「王子？」

「……ああ、すまない。」

眠っていた。ゴツカル將軍、今は休憩中か？」

「そうです。」

そろそろ骸骨君とやらに頼らねばなりませんので、魔女殿のご指示をいただこうかと」

「そうか。」

可哀想だが、起こすしかなさそうだな……」

「ん……」

「魔女殿、そんなに俺は寝心地がいいか？」

「……んー」

「ふむ、どうしたものかな」

「王子、どうか耐えましたか」

「いや、なんでもない。
すぐ行くから、棺の傍で待っていてくれ」

「承知」

「ん……？」

「ああ、惜しいな。目が覚めてしまったか
いや、その瞳を見られるなら構わない」

「……殿下」

「何だ？」

「……ん？」

「………殿下っ」

「ああ、そうだが」

「申し訳ありませんッ」

「顔が赤いぞ」

「ええ、ええそうですかっ
そんなこともないかと存じ上げますが……！」

「（かなり動揺しているようだな）
ゴッカル將軍が呼んでいたぞ」

「しよ、承知いたします!!」

「……………」

そんなに慌てて出て行かずとも」

その時の自分の挙動不審ぶりと、ただ単に羞恥とが入り交ざって、もう忘れたい記憶である。お陰でそっぽを向いてしまったサイネリアの額に、不意打ちでキスを落として、益々動揺させる。

「顔色が妙だな

女官長、良きに計らってくれ」

「承知いたしました」

ニヤニヤと笑うカーネルに、頬を僅かに赤く染めて眉根を寄せるサイネリアを見て何か察したのか、女官長は気の毒そうにサイネリアを助け出してくれる。

「カーネル様、あまりお戯れなさいますな。

お嬢様、どうぞこちらへ」

お嬢様、には撥つたい心地がしたが、願ってもない助け舟に、サイネリアは即座に飛び乗った。

背を向けて去っていくサイネリアに向かって、ぽつりと一言呟かれた。

「……ちよつと遊びすぎたか」

遣り残したことも山積みで、いつまでもそこにはたっ
ていら
れない。踵を返したその背中は、主人に無碍にされた犬のよう
だった
と、衛士は語った。

宮殿の母

「申し訳ありません。

私めのお諫めが不行き届きであつたばかりに、ご不快な思いをなさいましたでしょうか？」

やっとカーネルから離れられたサイネリアは、先導して案内してくれる女官長の言葉にとんでもないと返した。

「いいえ、あれは殿下ご本人の行いによるものです。

女官長殿がお気になさるようなことではございません」

カーネルが自分に対して楽しむと言うか、からかっているのは分かつているのだ。かと言って、突然免疫など出来るはずも無い。

少し疲れたような表情でそう零すと、女官長は大げさに驚いて見せた。

「まあまあ！

そのような事を仰るご令嬢をととうお連れになるだなんてッカーネル様にもやっと御慧眼が開かれたのでしょうか！！」

と言う事は、だ。つまりこう言うところだろう。この様に感動するとは、いつも目下の者に責任を転嫁して当然と言わんばかりのご令嬢を連れてきたことがあると言うことだ。「やっと」「ととう」と、言わせるほど多く。

「ご期待のところ申し訳ありませんが、私は言わば殿下の奴隷にわたくしございます。

私がいるからと言って、殿下の戯行が止むとは……」

「まあまああー！」

恋の奴隷だなんて、それほどにカーネル様を愛して下さっているとなると、もうこれは我らが主もきつと一途な愛に目覚めますわ！

「！」

「……………」

丸ごと無視ですか凄い技ね」

「私は女官長を勤めさせていただいておりますマーサにございますどうぞ、御用の際は遠慮なくお申し付けくださいませ」

「……………あ、はい。どうも」

マーサの勢いに圧されて返事もまともに出来なかったが、向こうが名乗ったのだからこちらにも名乗るべきだと気付いて口を開く寸前、気付く。

あら？私名乗ってもいいのかしら？……………良い訳あるかい。

名乗れば家名を名乗らなければいけないが、それでは魔女だと呼ばれてしまう。カーネルが言わなかったのだから、言わない方がいいだろう。

「（それに……………」

民はサイネリアを魔女だと歓迎してくれるが、王宮ではそうではないと思う。だが、王宮に登るのも初めてなら、都にさえ来たことのないサイネリアからすれば、未だかつて魔女だというだけで悪意に晒されたことなどなかった。

そして、この目の前の母のような女性の態度が、自分を蔑むようになるのが、ほんの少し、恐ろしかった。

覚悟はしてきたつもりでも、悪意に晒された経験もないサイネリアには、やはり少し、恐ろしかった。

「……では、少し旅の汗を流したいのですが」

「畏まりました、お嬢様」

につこりと笑ってそう言ったマーサの顔を見ながら、サイネリアは己のこれからについて思いを馳せた。

悪意、嫉妬、羨望、利益、あらゆるものに、自分は晒されるのだろう。利用され、ばろぼろになるのかもしれない。

「ご心配なさいますな」

「えっ」

「ふふ」

心でも読んだかのような鋭い指摘に、サイネリアは驚きに瞠目する。

だが、その優しい内容に、少しだけ、気負っていたものが楽になったような気がした。

「なるようになりますとも」

投げやりにもとれるその言葉が、だがしかし今のサイネリアにはとても優しく響く。

母の子守唄を聞きながら嬉しそうに笑っていた、幼いころが頭をよぎった。

マーサの溢れ出る母性は、やさしくサイネリアをあやして、落ち

着かせてくれた。

「ええ、そうですね」

そつと微笑んでそう言ったサイネリアを見て、マールサはまた一層
優しくそうに、そして嬉しそうに笑うのだった。

侍女

「この部屋でございますよ。
後で湯をもつてこさせますから、どうぞそれまでお寛ぎくださいな」

そう言つて、マーサは優雅に扉を閉めて出て行つてしまった。

「そう言われても……」

部屋を見回す。

「このただっ広い空間で？」

落ち着いた柔らかい木の色が多目に使われている部屋は、流石王宮と言うだけあつて広がった。そりやもう、広がった。

二つも三つもあるチェストには、それぞれ一流の職人が意を凝らして作ったのだらう細かい木彫りの細工だとか、飴色に輝く背の低い机、コーヒートーブルは台にガラスが嵌められていて、その隣には座り心地の良さそうなベージュのソファが二つ置かれ、広い部屋の中には大きなサロンテーブルに、やはり飴色の椅子が四脚。壁一面にガラス窓が嵌められ、日当たりもよく、そこからはベランダに繋がっているらしい。

ガラス戸のカップボードや、美しく幻想的な風景を緻密に表現したタペストリーや、小さく飾られた花の絵画、落ち着いた色の上質な絨毯に、サイネリアは重い溜息を吐きそうになった。

「日当たり良好。リラックス効果のある植物もあるし、華美過ぎないいい部屋だけど……」

ちょっと贅沢すぎ……」

お金が好きといっても、使うことが好きなのではなく、蓄えることが好きなサイネリアからすれば、何もかもが高級品で固められたこの部屋は贅沢に過ぎた。

だが、落ち着いた色合いや、無駄に何かを飾り立てているでもないこの部屋に、確かにサイネリアの気持ちは和む。

こんな部屋が王宮に他に存在しているとも思えず、また与えられた部屋に文句を言うつもりもないサイネリアは、ひとり納得して頷いた。

ガタンッ

「なに？」

小さく響いた物音は、部屋にあるドアの奥から聞こえてきたようだった。

ベッドなんかが見当たらないところからして、隣は寝室か、浴室になっているはずだ。

サイネリアと女官長よりも先に誰かが居る筈もなく、まさか客人を案内したにも拘らず、まだ掃除をしていると言ったこともないだろう。

「もう、ふふふ……」

媚びる様な女の声と、衣擦れの音に、サイネリアは状況を察して眉根を寄せる。

「（場所を選びなさいよ……）」

呆れ気分で、わざと大きな音を立ててドアを開ける。

「……貴女、何してるの？」

「いえ、それは私の台詞ですが……」

驚きに固まった衛士の制服を着た男と、侍女のお仕着せを身に付けた女は、お互いの服に手を掛けていて、今から何をしようとしているのかがありありと分かる状況だった。

その女に、逆に聞かれてサイネリアは思わず呟きを零した。

もう一言サイネリアが呟こうと口を開く頃には、衛士の男は顔面を蒼白にして、キョロキョロと辺りを窺っている。

「……え、もしかしてもしかなくても、新しくご滞在するお客様？」

「さあ、それが私のことかどうかは定かじゃないけど、少なくとも私もそれと似たような状況にはいるわよ」

「……あちゃー」

困ったなあと言いつつ、特に困ったようにも見えない侍女（らしき女）は密着していた男の身体を叩いて解かせると、しっしと追いつめようとする。それを天の助けと言わんばかりの目で見て、物凄い速さでサイネリアの脇をすり抜けていった男を、残った女二人は呆れの眼差しで見送った。

「逃げたわよ」

「逃げたねー」

全く、女一人残してこの場逃げ出すだなんて、とんでもない腰抜

けだなこりゃ」

「……」

全くその通りではあるのだが、普通当の本人がそれを言うか。しかも、もつと悪びれるだとか反省するだとか許しを請うだとか、他に一般的な反応があるだろう。

「と、言うか、今日着いたんでしょ？」

カーネルと……様と、おつさ……將軍と、ヘタレ……ノース補佐官と、ボルマツト殿下と一緒に着いた噂の人物？？」

所々不自然な程に修正を入れて喋る侍女（らしき女）は、ただの侍女ではなさそうだ。

なんせカーネルを呼び捨てで、ゴツカル將軍をおっさんと呼び、仮にも王子の補佐官をヘタレと最後まで言い切るのだから、なんとなく奴らの関係者の気がしてならない。

「部屋でも間違えたわけ？」

「ここには人も来ない筈なんだけど……」

「女官長のマーサ殿に案内されたのが私の記憶違いなら、貴女の言う通りかもしれないわね」

「え、母さんに？」

「こりゃあ間違いないやなさそうだ。あちゃー、大目玉だわこりゃ」

「私の滞在期間中にこういった事を、この部屋でしないでいってもらえるなら、別に誰に言うつもりもないわよ？」

首を傾げたサイネリアに、女は突然笑い出した。

「あははははははッ

ひーひー、あはははアフエ!!!」

何故母音が「あ」の発音で舌を噛むのかは謎だが、この不審人物にはなるべく関わりあいになりたくないの、深く考えないことにする。

「おおぅ!!」と言いながら口元を押さえて、おまけに笑いによじれた腹まで押さえている女に、サイネリアは帰りたくなった。

——ああ……何でこんな濃い人間に囲まれてこんな濃い目に会っの

絶望にも似た気持ちで、サイネリアは目を覆った。

立ち話（前書き）

今回も長くなってしまいました……

立ち話

「マーサ、お客人は不自由ないと？」

女官に湯を持っていくよう指示していたマーサは、皇后への面会の為正装をしたカーネルに声を掛けられた。

「あら殿下

ええ、ただ今より湯浴みをなさると仰ってありましたので、湯をお持ちするところです」

後ろを振り返ったマーサの言葉に、カーネルは思案顔になる。

「……湯浴み」

「？ ええ、どうかなさいましたか？」

「いや、彼女の入浴に付き人はいらないだろうから、侍女たちにそう伝えてくれ」

カーネルのその言葉を聞いて、マーサは感激の言葉を漏らす。

「ええ、ええ！そのように！！」

全く殿下、あのような方がいらつしやるのでしたら、このマーサにもっとお早く伝えてくださればよろしいですねに！！

ああ、あんなにお小さかった殿下が、こんなに大きくなられて……浮名を流し、華のある生活をされていて、本当に愛する方が出来るのとは訳が違いますわぁッ

ああ、私は感動でございます」

「い、いや、マーサ、彼女は」

「魔女だ」と言おうとして、辛うじて思いとどまる。

先々代（カーネルが王位に就けば三代前となる）の魔女追放の件もあり、貴族の中にはまだ魔女に対する嫌悪や悪意を持っているものが多く、下手なタイミングで暴露すれば危険と言うことも有り、カーネルは自分が王位に就き且つそれが認められるまでサイネリアのことは明かさなつもりでいる。

女官長まで務め上げるマーサもまた、貴族の出だ。王宮に勤める者の多くは、何らかの爵位や資産家であることが多く、その者達にその情報が漏れればサイネリアは悪意に晒されることになる。だが、身の回りの世話をする者に、一人でも事情を知るものが居ると居ないとは大違いだ。マーサにぐらいは事情を知っておいてもらい、信頼の置ける人間にサイネリアの身の回りの世話をさせたかった。

「はい？何でしょう？」

熱くなり過ぎてカーネルの言葉が聞こえていなかったらしい。好都合だ。

「マーサ、少しいいか」

カーネルの真剣な様子に、ただならぬことだと、長年王宮で勤めてきた勘が囁いたようだ。周りの侍女や宮女は忙しく動き回っている。下手に部屋などに入っていくにも「秘密の話、大事な話をしてますよ」と言うよりも、様子に注意さえすればこの方が話しやすい。

声量を落として、周囲に聞き取りにくくする。だが、普通に話している、と錯覚させる程度の絶妙な加減だ。何か話していて、注意

を向ければ聞き取れるかもしれないが、普通に話しているように見えるので注目されない、と言うのがポイントだ。

「彼女は貴族ではない。

ちなみに言えば、俺の寵愛も受けてはいないぞ」

「……そのような方でしたか。あのお美しさでしたから、てっきり坊ちゃんのお相手かと

私も王宮にお勤めしてもう長くなりますが、あれ程にお美しい方は、滅多にお目には掛かれません。女の身ではありますが、不躰にも見惚れてしまいましたわ。

それで、一体どのようなご身分の？」

サイネリアの美しさを褒めちぎって、やっと正体を問う。

褒められたのはサイネリアであるのに、カーネルは何故か誇らしくなくて、俄かに気分が浮き立つ。

「ああ、国をも動かすご身分の方だ。

下手をすれば、国王よりも影響力のある」

ここまで言われれば、マーサにはピンときた。

「……まさか」

「そう、そのまさかだ。

兄上を探し出せたのも彼女の力が大きい。

それに、俺は一度彼女に命を救われている」

最後の一言に思いを馳せる。

一応確認しておくが、サイネリアとカーネルが知り合ったのは、

つい昨日のことである。

一、カーネルを助ける。

二、ボルマツトの話を聞く。

三、夜中にボルマツトに襲われる。

四、翌日の早朝にカーネルに主従の誓いを立てる。

五、午前のうちに出発し、昼過ぎに王城へ帰還。

六、で現在にいたる。

というわけで、まだ出会ってから一日とは経っていないのが不思議である。

「先々代……百二十五代目のバライスク王の寵愛を拒んだ魔女とは既に代替わりしてる。」

今は彼女が『善き魔女』だ。」

「まあ、そうでございましたか

あの様なお嬢様が……」

「ああ、もう百年以上も前のことになる上に、バライスク王が魔女の文献なんかは燃やしてしまったからな。何百年も生きると言われて、勝手に老婆を想像してた」

複雑そうな顔をするマーサに、カーネルは釘を刺す。

「くれぐれも、他言は無用だ

……もう既に一人には知らせてあるが
あとはノースとゴツカル將軍だけだ」

「承知いたしました。

このマーサ、ご命令とあらば秘密は墓まで持って参りますっ」

裾を持つて優雅にお辞儀をしたかと思えば、次の瞬間にはガッツポーズを取るマーサを見て、カーネルは少し不安に思うのだった。

「にしても坊ちゃま」

「その坊ちゃまと言うのは止めてくれと何度も――」

ああ！いや、もういいっだからそんな顔をしないでくれ！！」

幼い頃からカーネルの面倒を見てきてくれたマーサである。言わば二人目の母とも言える人間が薄っすらと涙を浮かべるのを見れば、カーネルともうそれ以上は何も言えない。

「お許しただけでようございました。

私、魔女と言うのは、もっとこう……

黒いと言いますか、邪悪な印象を持つておりましたのですが、お嬢様はそれとは掛け離れておいでですね

とても優しい方かと存じます。あれ程の美貌ですのに、^{おこ}驕ったところも無ければ、その己の振る舞いに優越感を感じて居られる様子もございません

正体云々以前に、私はあの方にとっても好感をいだいております」

マーサの言葉に、カーネルはふつと笑う。サイネリアが褒められるのは、気分がいい。

俗世間とは離れた生活をしていた所為か、はたまたサイネリアの言っていたように魔女故の欲の薄さからなのかは分からないが、サイネリアには驕りや、媚びと言ったカーネルの最も嫌う感情が窺えない。

だが、その割に何も考えていない訳でもなく、計算高い一面もある。ただ美しい感情だけの人形ではなく、今を生きる命の一つなのだと、カーネルに強く意識させたのは彼女が初めてだった。

「ああ、そうだな」

「よいお顔でございますよ坊ちやま」

母の顔で笑うマーサに、よい顔と言われれば、自分にもこんな風な人間味が溢れているのかと思うと少し不思議だ。

「話は仕舞いにしよう、マーサの指示が欲しいようだ」

カーネルにそう言われてマーサが後ろを振り返ると、まだ王城に上がったばかりなのかおろおろとした若い娘が何やら白い布の塊を持ってしきりにこちらを見ていた。

新人らしいその宮女は、身分のある二人の会話に遠慮していたようだ。

「あら、それはバスローブね。持ってお行きなさい」

「あ、でも、私まだあのお部屋には入れないんです……
先輩方の忘れ物で……」

女中や宮女にも階級という物はある。数えだしたらきりが無いが大まかに下から、洗濯女、宮女、女中^{メイド}、女中頭、女官、女官長となっている。女性は細かく分けられているが、男性は使用人か、執事のふたつだけだ。

これは昔からのしきたりだが、階級分けをすることで劣等感や闘争心を刺激することになってしまっていることに、カーネルはふと気付いた。

賓客や王族の部屋に入れるようになるのは女中頭以上でないと入れないから、宮女は困っているらしい。

「（改正の余地有りだな）」

「困ったわね……私も手が空かないし、他の子たちは皆出払ってるのに」

その言葉を聞いて、カーネルはほぼ無意識の内に言葉を発してしまっただ。

「それなら俺……私が行こう」

「えッッ」

「まあ、ですがぼっちゃ——」

殿下は皇后陛下へ帰還とボルマツト殿下のご報告をされに行かれるのでは」

無意識に発してしまった言葉だったが、悪くないように思えて、カーネルは宮女からバスローブを口八丁で貰い受けた。

「どうかそれを私に渡してくれるか？」

「あ……はい」

少し顔を近づければ、宮女はぼーとした顔になり、言われるがままにそれを渡してしまう。

「無理を言つてすまないな」

最後にふつと宮女に笑いかけて、マーサに「時間なら大丈夫だ」

と言に残して去っていった。

その背中は心なしかうつきつきとしているように見えたと、その時の宮女はぼーっとした頭で思ったらしい。

立ち話（後書き）

解説を少々……

使用人には色々混ぜてみました。宮女と言うのは日本などで使われる女性の使用人のことです。別に階級的にメイドに劣っているということはありません。

皇后 国王、または皇帝の正妃（第一夫人）。作中ではボルマツトとカーネルのお母さんです。

王太后 前国王、またはそれ以前の国王も含む、皇后のことです。

作中ではまだカーネルは王位に就いていないので、現国王は既亡くなっているんですがカーネルとボルマツトのお父さんのことです。ですので、その奥さんもまだ皇后ですね。

いつもカーネルとボルマツトの名前を間違えます。

だって何だかボルマツトの名前の方が主役級の気がするんです（
）じゃあ何でそっちにした

……なんとなくですね（
・ω・
）

護衛と侍女

——うつ……うつ……

——しくしくしく……

「な、何だ？」

サイネリアの居る筈の部屋へと近付くにつれて聞こえてきた
啜り泣く声に、カーネルは思い切り焦ってドアを開け放った。

「うつうつうつ」

「しくしくしくすん」

「……」

何なんだ、一体……

きつとその光景を目にすれば誰もが抱くであろう感想を心中で
呆然と呟いて、カーネルは現実を逃避するようにふっと口元には
笑みを浮かべて、ゆっくりと目を瞑った。

「どうしたんだ」

異常な状況に頭を抱えそうになりながら、目を瞑ったままその
声を掛ける。

「うつうつ……」

どうして、こんな濃い経験をしなければ……」

「舌嚙んだー……」

いひゃい——ってあ、カーネルあんたちよつとこの部屋に通すなんてどうゆーつもりイ？」

「……一体何なんだ」

チンピラのように絡んで来る女は、言葉もそのまま、チンピラのようにだ。

疲れたようにそう零して、カーネルは壁にしな垂れかかるサイネリアに白い布の塊を差し出す。

「??」

何です？」

演技だったのか、それともすぐに乾いたのかは分からないが、サイネリアの涙はすっかり引込んで、カーネルに渡された物を広げる。

すぐに、先ほど湯浴みをすると告げた事に思い至り、手で広げたバスローブを再び簡単に畳みなおした。

「ちょっと無視ってそりゃないでしょ」

「あー、分かった分かった説明する」

先程から執拗に説明を求めてくる侍女らしき女に、カーネルは面倒臭そうにそう返す。随分と砕けた口調だった。普段から言葉使いやマナーなどに気を使っていることは、この2日でよくわかる。洗練されているのは幼い頃から徹底的に仕込まれたという事もあるのだろうが、その他大勢が居る時でも、マーサのように母代りの身内

のような人間が居る時でも、言葉遣いは違えど丁寧な所作やマナーにほとんど変化は見られない。

それ程に己の振る舞いに気を付けるのは、やはり自分の置かれる地位とそれに伴う責任によるものなだろう。そのカーネルの態度が今はどうだろう。所作の洗練された動きこそ変わらないものの、シッシと手を振ったり、詰め寄ってくる彼女の額を掴んで追い遣ったりもしている。

余程親しいらしい。普段のカーネルなら有り得ない仕草だった。

「もうノースから説明は受けてるな？」

女を面倒臭そうに追いやってから、眉間に皺など寄せて、おもむろに説明を始めた。女もそれに答える。

「あー、何だっけ??」

……あッそうそう、どちらさんかの護衛云々かんぬん。」

カーネルは呆れたように溜息を吐く。

「はぁ……また聞いてなかったな。

いいか、よく聞けよ。

ここに居る、サイネリア嬢の護衛をしてもらっ

「ふんふんおっけーおっけー」

「はぁい!？」

女の安請け合いのような返事も殆ど言い終わらぬ内に、サイネリアは思い切り顔を顰めて動揺の声を上げた。

「私ですかッ？」

「彼女の正体はもう知ってるな、侍女としてサイネリアに付ける。」

「あー、んーっと??何だっけか……」

頭を捻って考え始めて、思い出したのかすぐに顔を上げた。

「ああ！魔女ねッッ

……て、魔女??」

ぽんつと掌を叩いてから、またすぐに首を捻る。
どうやらこの国では、文献不足によって魔女の正体が殆ど謎のようだ。

「若くない??」

「歳は俺も知らないな」

「……18になりますけど

そもそも、魔女の外見は死ぬ迄、人生で一番美しい姿です。」

サイネリアの発言に、二人は驚いたように顔を見合わせた。

「魔女はどれくらい生きるんだ」

「それは魔女それぞれですが……

そうですね、平均600年ぐらいかと」

「じゃあ、お嬢さんはまだヒヨツ子な訳か」

「……ええ、まあ」

魔力の安定を図る「星の導き」。

生命が芽吹く時、それぞれに生まれた時の星は決まっていると言う。人間で言うならば星占い、植物で言うならば月の周期。そして魔女は、十八の時がそうだと言われている。

十八で、やっと生まれた時の星が一周目を迎える。その一周目の星から、魔力を引き出すのだ。体中に霧散し、纏まり無く荒れ狂っていた魔力を一点に集中し、心臓を押し出すかのように、左胸へと魔力の“核”を作るのだ。それと同時に、星から引き出せる膨大な魔力で心臓に半停止の魔法を掛ける。この魔法こそが、魔女の神の領域に踏み込みえたる長寿の理由である。

だが、心臓があつた場所に“核”を作っている為、自分では集中力を要する半停止の魔法は掛けられない。それ故に、立会いの魔女がいるのだ。

この立会いの魔女の腕の良し悪しで、魔女の寿命は長くもなるし、短くもなる。

「で、話を戻す。

サイネリア、これは」

「これとか言わないでよっ」

が、カーネルは華麗に無視した。

「ジルットだ。女官長マーサの一人娘にあたる。」

「ジルット・レシュベルト

よろしく、えーっと??」

「サイネリア・パルケット・ヴィヴィッドと申します」

そう言つて笑つた侍女兼、護衛のジルットは、お辞儀ではなく、握手を求めてきた。

女性の作法としては先ず有り得ないことで、だが、ジルットは妙に晴れやかに笑うので、サイネリアも釣られて漏れた笑いと共に、ジルットの手を握り返した。

護衛を付けると言うカーネルの選択がいかに正しいか、これから暮らすこの王宮で、サイネリアは身をもって知ることとなる。

立場

「侍女はジルツトの他に2名付ける。

ここでの立場は、將軍の姪御が、婚約の申し込みに来たことになっている」

「ははあ、そりゃあ一体誰のさ？」

「勿論俺だが。」

カーネルが事も無げにそう言い切ると、ジルツトは嫌な笑みを浮かべてカーネルを眺める。

「別に待遇さえ気にしなきゃ、

侍女だとか女官だとか、その方が人の目は惹かないでしょう？」

「サイネリアは人目を惹きすぎる。

手も荒れてない、所作も洗練されている。

何より俺と密会するのはこの城の中では限界があるからな、それなら身分相応の人間に、俺が会いに行っているという方が自然だろう」

女官の地位まで来れば、行儀見習いとして貴族の娘が来ることも多い。手が綺麗で、所作が洗練されていても、別段不自然ではないのだが、カーネルがサイネリアを婚約者候補として迎え入れたいのには他にも理由がありそうだった。

「まあアンタの場合そうかもねえ

浮名を馳せる王子様、ついに本命現れり！証拠によく面会に御出

でになる！！

てな感じ？

女関係の方がアンタの場合皆納得してくれるもんねえ」

ニヤニヤと笑いながらそう言うジルットに、カーネルは何故か胸を張って言い張る。

「世の中の花は須らく愛でるべきだからな」
すべか

「「はあ……」」

成り行きを見守っていたサイネリアとジルットは同時に溜息を零す。

「アンタはそう言う奴よ」

「ジルットは体術にも長けている。勿論侍女の仕事もこなせる、城での事はジルットに聞くといい。

俺はそろそろ母上に目通りをお願いしてるからな、もう行く」

「あー……」

まあお母上にはご愁傷様ですって伝えといてやあ」

ジルットは、ヒラヒラと淑女らしからぬ所作でぞんざいに手を振る。

「ああ、伝えとくよ」

それで正装だったのかと納得して、ドアに向かう背中にサイネリアは丁寧に頭を下げた。

「行つてらっしゃいませ」

ドアに手を掛けていたカーネルは驚いた様に振り返つて、サイネリアの姿を見て微笑んだ。

「行つてくる。」

夕食は一緒に摂ろう、連絡事項も食事中に失礼だがそこで伝えるよ」

そう言つてカーネルはドアの向こうへと消えていった。

「さて、」

ドアの閉まる音にサイネリアが頭を上げると、人の悪い笑みが此方を凝視していた。

「晚餐に顔をお出しになるようですね、お嬢様」

言葉遣いは丁寧なのに、ニヒツと笑い、不遜に両手を腰に当てているジルットに、サイネリアは引きつった笑いしか返せなかった。

「さあさあ、飾り立て甲斐のありますことつ
先ずは、湯浴みですねえ」

サイネリアは頭の中で初めて神に祈つた。

——ああ、神様、どうかお慈悲を……

さあ、晚餐へ

「……これで行くの？」

「ええ、ここ最近じゃあ一番自信がありますよ。
アタシの腕のご披露ってことねえ」

嫌な笑みを浮かべたジルットに、早々に湯船に連れて行かれ、侍女としての仕事までソツなくこなすらしいジルットに手早く、しかし散々弄ばれながら飾り立てられ、サイネリアの顔はまだ晚餐に参加してもいないと言うのに心なしに疲れている。

「髪、よし。

顔、よし。

服、よし。

靴、よし。

ほおらやつぱり完璧でしょ」

鏡台の前にサイネリアを座らせて、背後から鏡越しに散々吟味した後、自分の仕事ぶりに満足したのかジルットは満面の笑みでうんうんと頷いている。

「ここまで変わるのね」

鏡の中に映る品の良い女性を見ては、信じられない心地で呟く。
白く柔らかく輝く白金の髪はカールを掛けて後ろに纏められ、露になった耳には金の細工にダイヤがふんだんに使われたイヤリング、細っそりした首には品の良い細いチェーンに小さなピンクサファイアが控えめに提がり、柔らかいクリーム色のシンプルなドレスに身

を包み、足元には美しく履き慣れないヒールを履いて、サイネリアは無感動である。

「……何か、あんまし嬉しくないって？」

鋭くそう指摘してきたジルットに、サイネリアは少し慌てて弁明する。

「い、いや、嬉しくないわけじゃ……」

「自分に興味がないと見たっ」

ギクリと肩を竦ませる。

「そう言うんじゃない……」

「ふむ、じゃあ実感湧かないってえな感じ？」

実感云々の前に、自分が飾り立てられてもあまり感動がないのだと、言うよりも、サイネリアは余り自分に対して執着がない。それは昔からで、なんとなくそのままズルズルとその性分が続いている。

「実感、持たせて進ぜよう。」

「え？」

「きゃあ！

サイネリア様素敵ですわ！！

何てエロティックな頂^{うなじ}つ殿方皆ノックアウトですわ！！皆鼻の下伸ばして待て、で待機の犬状態で舌なめずりものですわ！！そのの

後れ毛！！まあまあ何てミステイク！！」

「い、いや、ミステイクは違……」

「それにこの御髪おぐしの輝き！月の女神様に嫉妬してブチ殺されますわね！！

まあまあお肌も雪のようですわ！！これがほんのり赤付いた頃にやあ涎どころか鼻血垂らしますよ！！」

褒められているのにこんなにげっそりとしたのは初めてである。

「……ジルット、お前には文才が皆無だ」

呆れたように疲れたように、部屋の入り口から声が聞こえた。

「ちょっとカーネル、淑女の部屋にノックもなしに無礼極まりないんじゃない？」

ドアに凭れ掛かるようにして腕を組んでいたカーネルは、その腕を解いてゆっくりと此方へ歩を進めた。

「お前の下劣な贅辞の所為で聞こえなかったんだろう」

呆れたように溜息を零すカーネルに、むっとしていたジルットは途端にあの例の嫌な笑みを浮かべた。

「とかなんとか言つて、自分だつて褒められなかったじゃない」

サイネリアの隣に立って呆れたようにジルットを見るカーネル。

「寝めるも何も、今から言っただぞ」

「さつきから部屋の中に居たのに動かなかったってことは、このお嬢さんに見惚れて動けなかったってことでしょあ？」

「っ！」

目を瞠って一瞬硬直するカーネルに、ジルットは追い討ちを掛ける。

「ほーら凶星」

始まった言い争いを死んだ魚の様な目で生氣無く見守っていると、カーネルが咳払いをする。

「ノース補佐官とゴツカル將軍がお待ちだ。それに皇后陛下もな」

その一言はカリスマ性に溢れていて、サイネリアもジルットも、気を引き締めて立ち上がった。

これがサイネリアの王宮での第一幕となる訳だが、本人はそんなことを知る由も無いわけだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3714t/>

魔女の事情

2011年8月6日15時20分発行